

香川県

侵略的外来種リスト

2021

<目次>

I	香川県侵略的外来種リストの作成にあたって	1
1	侵略的外来種とは	1
2	侵略的外来種リスト作成の背景・目的	2
3	選定理由など	2
4	侵略的外来種のカテゴリ区分	4
5	選定の体制	5
II	香川県で生息・生育が確認されている侵略的外来種リスト（一覧）	7
III	侵略的外来種現地調査リスト（動物）	9
IV	侵略的外来種現地調査リスト（植物）	11
V	種の解説	13
1	緊急対策外来種	13
2	重点対策外来種	17
3	その他の総合対策種	25
4	産業管理外来種	37
5	特別選定種	41
VI	侵略的外来種 侵入警戒種リスト	43
VII	侵入警戒種リスト 種の解説	45
VIII	参考文献	47

I 香川県侵略的外来種リストの作成にあたって

1 侵略的外来種とは

我が国（環境省）の「外来種被害防止行動計画」（平成27年3月）によると、「外来種」とは導入によりその自然分布域の外に生育又は生息する生物種をいう。この際、その導入については意図的・非意図的を問わず人為的に、過去あるいは現在の自然分布域外へ移動させることを指し、また導入の時期は問わない。さらに、自然分布域とはその生物が本来有する能力で移動できる範囲により定まる地域を意味し、生物種とは分類学的に異なる集団とされる、亜種、変種を含んでいる。

ところで、外来種には以下のように4つに分類・定義される。その第一は「国外由来の外来種（外来生物法で定義する外来生物）」であり、「外来種」のうち、我が国に自然分布域を有していない生物種を指す。

第二には、「国内由来の外来種」であり、我が国に自然分布域を有している（在来種）が、その自然分布域を越えて国内の他地域に導入された生物種を指す。

第三は本リストにおいて取り扱う「侵略的外来種」である。これは、外来種のうち、わが国の生態系、人の生命・身体、農林水産業等への被害を及ぼす又は及ぼすおそれがあるなど、特に侵略性が高く、自然状態では生じ得なかった影響をもたらすものをいう。

最後の第四は、「特定外来生物」であり、これは生態系等に係る被害を及ぼし、又は及ぼすおそれがあるものとして、外来生物法によって規定された外来生物を指す。これは、生きているものに限られ、卵、種子、器官などを含む。飼育・栽培、運搬、輸入、野外への放出、譲渡等が規制されている。

外来種

国外又は国内の他の地域から人を介して導入されることにより本来の生息地又は生育地以外の地域に存することとなる生物。

侵略的外来種

外来種被害行動計画に基づき国がリスト化。
「外来種」のうち、我が国の生態系、人の生命又は身体、農林水産業等への被害を及ぼす又は及ぼすおそれがあるもの。

県侵略的外来種リスト

外来種被害行動計画に基づき県がリスト化。
侵略的外来種のうち、その地域に生息する又は侵入する恐れのあるものをリストアップしたもの。

特定外来生物

我が国の生態系等に係る被害を及ぼす又は及ぼすおそれのあると認められる外来生物として、外来生物法に基づき指定されたもの。飼育・栽培、運搬、輸入などが規制される。

2 侵略的外来種リスト作成の背景・目的

ところで、我が国の外来種対策は、「特定外来生物による生態系等に係る被害の防止に関する法律（外来生物法）」（平成17年6月施行）に基づき実施されてきた。同法により指定された特定外来生物は、輸入・飼養等が規制されるとともに、防除が推進される。

さらに、「要注意外来生物」が平成17年に選定された。この選定の目的は、被害のおそれがあるが、法的な規制をかけることによる弊害が懸念される外来種等についても取扱いに係る注意喚起等を図るためである。しかし、「要注意外来生物」については、具体的な対策の方向性等が示されていない等の課題があった。さらに、外来生物法の規制対象とならない国内由来の外来種への対策の必要性も高まっていた。

平成27年になると、環境省は「外来種被害防止行動計画」及び「我が国の生態系等に被害を及ぼすおそれのある外来種リスト（生態系被害防止外来種リスト）」を公表した。この計画では47都道府県が、「侵略的外来種リスト」を令和2（2020）年までに策定することを目標に掲げている。

ところで、香川県においても、外来種問題は深刻化してきており、オオキンケイギクなどの外来植物の繁殖が県内各地で確認されているほか、セアカゴケグモの発見事例が年々拡大しており、人身被害の発生などが懸念されている。また、ヒアリやアカカミアリ、アルゼンチンアリなどが隣接県にまで迫っており、香川県内への侵入が警戒されている。

したがって、香川県内の侵略的外来種の現状について県民に広く周知し、十分な理解を得ることが課題となっている。

このため、本県の地域性や実状を踏まえ、影響・被害が大きく対策が必要な外来種を明確化するとともに、県民の外来種問題への関心や理解を高め、防除意識の向上を図ることを目的として「侵略的外来種リスト」を香川県で初めて作成することとした。

このリストは、優先度を踏まえた適切な防除についての検討を進めるための基礎資料として活用するとともに、本リストを県民に公表することで、公表した外来種を飼養・栽培しないように普及啓発に取り組み、香川県内の生物多様性の保全に資するものとする。

3 選定理由など（表1を参照）

（1）選定理由

本リストでは、国（環境省）のリストの選定理由を参照した。国のリストでは動物と植物で別の選定理由の項目が設定されているが、本リストではよりわかりやすいように、動物と植物で統一した選定理由の項目を設定した。

（2）対策優先度の要件

対策優先度の要件は、全て国の項目を採用した。

【表1】国（環境省）と香川県の選定理由、対策優先度の要件の比較一覧

区分	国(環境省)		香川県
	(動物)	(植物)	
選定理由	I. 生態系被害が大きいもの。	I. 生態系被害のうち交雑が確認されている、またはその可能性が高い。	I. 生態系被害が大きいもの。
	II. 生物多様性保全上重要な地域に侵入し、問題になっている又はその可能性が高い。	II. 生物多様性保全上重要な地域に侵入し、問題になっている又はその可能性が高い。	II. 生物多様性保全上重要な地域に侵入し、問題になっている又はその可能性が高い。
	III. 生態系被害のほか、人体や経済・産業に大きな影響を及ぼすもの。	III. 人体に重篤な被害を引き起こす、またはその可能性が高い。	III. 生態系被害のほか、人体や経済・産業に大きな影響を及ぼすもの。
	IV. 知見が十分でないものの、近縁種や同様の生態を持つ種が明らかに侵略的であるとの情報があるもの、又は、近年の国内への侵入や分布の拡大が注目されている等の理由により、知見の集積が必要とされているもの。	IV. 生態系被害のうち競合又は改変の影響が大きく、かつ分布拡大・拡散の可能性も高い。	IV. 知見が十分でないものの、近縁種や同様の生態を持つ種が明らかに侵略的であるとの情報があるもの、又は、近年の国内や近隣県への侵入や分布の拡大が注目されている等の理由により、知見の集積が必要とされているもの。
		V. 生態系被害のほか、人体や経済・産業へ幅広く被害を与えており、かつ分布拡大・拡散の可能性もある。	V. (植物のみ) 生態系被害のほか、人体や経済・産業へ幅広く被害を与えており、かつ分布拡大・拡散の可能性もある。
対策優先度の要件	国(環境省)		香川県
	①生態系に係る潜在的な影響・被害が特に甚大である。		①生態系に係る潜在的な影響・被害が特に甚大である。
	②生物多様性保全上重要な地域に侵入・定着し被害をもたらす可能性が高い。		②生物多様性保全上重要な地域に侵入・定着し被害をもたらす可能性が高い。
	③絶滅危惧種等の生息・生育に甚大な被害を及ぼす可能性が高い。		③絶滅危惧種等の生息・生育に甚大な被害を及ぼす可能性が高い。
	④人の生命・身体や農林水産業等社会経済に対して甚大な被害を及ぼす。		④人の生命・身体や農林水産業等社会経済に対して甚大な被害を及ぼす。
⑤防除手法が開発されている、又は開発される見込みがある等、一定程度の知見があり、対策の目標を立て得る。		⑤防除手法が開発されている、又は開発される見込みがある等、一定程度の知見があり、対策の目標を立て得る。	
分布の区分	県内限定分布種：香川県で確認されている分布地が1・2ヶ所程度で限定される種。		
	県内点在分布種：香川県で確認されている分布地域が数カ所ある種。		
	県内広域分布種：香川県内に広く分布する種。(分類群毎に判断)		
防除対象種の選定区分	◎：具体的な防除対策が取れ、その効果も期待できると考えられる種 (例)タイリクバラタナゴ		
	○：香川に侵入した時期が浅い、もしくは分布が限られているため、早期に防除することが好ましいと考えられる種		
	△：すでに県下に広く分布し防除が現実的に困難であるが、移動や放流を禁止するなどの普及・啓発をしていく必要があると考えられる種 (例)アカミミガメ、ウシガエル、ブラックバス、ブルーギル		
	—：上記以外		

4 侵略的外来種のカテゴリ区分

香川県侵略的外来種リスト選定種については、対策の優先度を明確にするため、以下のようなカテゴリに区分した。なお、本リストは県内に既に侵入している「侵略的外来種のリスト」である。県内に未侵入であるが警戒すべき侵略的外来種については、「侵入警戒種リスト」として別添している。

(1) 総合対策外来種

国内に定着が確認されているもの。生態系等への被害のおそれがあるため、国、地方公共団体、国民など各主体がそれぞれの役割において、防除（野外での取り除き、分布拡大の防止等）、遺棄・導入・逸出防止等のための普及啓発など総合的に対策が必要な外来種。

1) 緊急対策外来種

「外来種被害防止行動計画」における対策の優先度の考え方（2頁の表1を参照）に基づき、被害の深刻度に関する基準として①～④のいずれかに該当することに加え、対策の実効性、実行可能性として⑤に該当する種。特に緊急性が高く、特に、各主体がそれぞれの役割において、積極的に防除を行う必要がある。

2) 重点対策外来種

「外来種被害防止行動計画」における対策の優先度の考え方に基づき、被害の深刻度に関する基準として①～④のいずれかに該当する種。甚大な被害が予想されるため、特に、各主体のそれぞれの役割における対策の必要性が高い。

3) その他の総合対策外来種

(2) 定着予防外来種

国内に未定着のもの。定着した場合に生態系等への被害のおそれがあるため、導入の予防や水際での監視、野外への逸出・定着の防止、発見した場合の早期防除が必要な外来種。

1) 侵入予防外来種

国内に未侵入の種。特に導入の予防、水際での監視、バラスト水対策等で国内への侵入を未然に防ぐ必要がある種。

2) その他の定着予防外来種

侵入の情報はあるが、定着は確認されていない種。

(3) 産業管理外来種

産業又は公益的役割において重要であり、現状では生態系等への影響がより小さく、同等程度の社会経済的効果が得られるというような代替性がないため、利用において逸出等の防止のための適切な管理に重点を置いた対策が必要な外来種。利用にあたっては種ごとに示す利用上の留意事項に沿って適切に管理を行うことを呼びかけるもの。

(4) 特別選定種

環境省のリストにないが、香川県で問題となりそうな侵略的外来種。

5 選定の体制

香川県侵略的外来種リスト作成のための調査については、これまでの「香川県レッドデータブック改訂検討業務」によって検討された改定作業に関する基本計画に基づいて、希少種の調査と同時並行で実施した。具体的な実施に当たっては、「レッドデータブック改訂検討会議」を開催し、必要な協議を行った。「香川県侵略的外来種リスト」は、国（環境省）によるカテゴリの変更や各分類群の代表責者の意見を適宜反映させながら、改訂を重ねて作成した。改訂検討会議のメンバーは以下のとおりである。

植 物	末広喜代一
哺乳類	金子 之史
鳥 類	大川 庫弘
両生・爬虫類	篠原 望
汽水・淡水魚類	安藝 昌彦
昆虫類	伊藤 文紀
甲殻類	金森 正博
陸産・淡水産貝類	多田 昭・矢野 重文

II 香川県で生息・生育が確認されている侵略的外来種リスト(一覧)

哺乳類		
総合的に対策が必要な外来種 (総合対策外来種)		
緊急対策外来種		
1	アライグマ	特
2	ヌートリア	特
重点対策外来種		
3	カイウサギ(アナウサギ)	
4	ハクビシン	
5	対馬以外のチョウセンイタチ その他の総合対策外来種	
6	クマネズミ	
7	ハツカネズミ	
8	ドブネズミ	

鳥類		
総合対策外来種		
重点対策外来種		
1	ソウシチョウ	特
その他の総合対策外来種		
2	コリンウズラ	
3	コウライキジ(大陸産亜種)	
4	コブハクチョウ	
5	ヒゲガビチョウ	特
6	ハッカチョウ	

両生・爬虫類		
総合対策外来種		
緊急対策外来種		
1	カミツキガメ	特
2	ワニガメ	
3	アカミミガメ	
重点対策外来種		
4	ウシガエル	特

魚類		
総合対策外来種		
緊急対策外来種		
1	ブルーギル	特
2	オオクチバス	特
重点対策外来種		
3	タイリクバラタナゴ	
4	カダヤシ	特
5	ガー科全種	特
6	カムルチー	
その他の総合対策外来種		
7	ソウギョ	

昆虫類		
総合対策外来種		
重点対策外来種		
1	ビロキジラミ	

陸生節足動物		
総合対策外来種		
緊急対策外来種		
1	セアカコケグモ	特

その他の無脊椎動物		
総合対策外来種		
緊急対策外来種		
1	アメリカザリガニ	
重点対策外来種		
2	スクミリンゴガイ	
3	ハブタエモノアラガイ	
4	コウロエンカワヒバリガイ	
5	タイワンシジミ	
6	シマメノウフネガイ	
7	シナハマグリ	
その他の総合対策外来種		
8	マツノザイセンチュウ	
9	ムラサキガイ	
10	ミドリイガイ	

植物		
総合的に対策が必要な外来種 (総合対策外来種)		
緊急対策外来種		
1	外来アゾラ類	特
2	ナガエツルノゲイドウ	特
3	アレチウリ	特
4	オオフサモ	特
5	オオカワヂシャ	特
6	オオキンケイギク	特
7	ミスヒマワリ	特
8	オオハンゴンソウ	特
9	ナルトサワギク	特
10	ボタンウキクサ	特
重点対策外来種		
11	ウチワサボテン属	
12	ハゴロモモ	
13	園芸スイレン	
14	オランダガラシ	
15	モリシマアカシア	
16	イタチハギ	
17	ニワウルシ	
18	コマツヨイグサ	
19	トウネズミモ	
20	ツルニチニチソウ	
21	外来ノアサガオ類	
22	シチヘンゲ	
23	オオブタクサ	
24	セイトカアワダチソウ	
25	オオアワダチソウ	
26	外来性タンポポ種群	
27	オオカナダモ	
28	コカナダモ	
29	ホテイアオイ	
30	キショウブ	
31	ノハカタカラクサ	
32	シナダレスズメギヤ	
33	チコグスズメノヒエ	
34	シュロガヤツメリ	
35	メリケンガヤツリ	
36	ケツメクサ	
37	アオノリュウゼツラン	
その他の総合対策外来種		
38	コンテリクラマコケ	
39	ヒメツルソバ	
40	ヒマスイバ	
41	ナガバギンギン	
42	エゾノギンギン	
43	ムシトリナデシコ	
44	マンテマ	
45	アツミゲン	
46	ハルザキヤマガラシ	
47	セイヨウカラシナ	
48	エニシダ	
49	アレチヌスビトハギ	
50	オオキバナカタバミ	
51	カミヤツデ	
52	オオフタバムグラ	
53	アメリカネナシカズラ	
54	ホシアサガオ	
55	アレチハナガサ	
56	ヤナギハナガサ	
57	ダキバアレチハナガサ	
58	ヨウシュチョウセンアサガオ	
59	ツノミチョウセンアサガオ	
60	シロバナチョウセンアサガオ	
61	ケチョウセンアサガオ	
62	ウキアゼナ	
63	ワタゲハナグルマ	
64	ユウゼンギク	
65	アメリカセンダングサ	
66	栽培キク属	
67	ケナシヒメムカシヨモギ	
68	ハルシヤギク	
69	ヒメジョオン	
70	ペラペラヨメナ	
71	フランスギク	
72	アラゲハンゴンソウ	
73	オオオナモミ	

74	シンテッポウユリ	
75	ハナニラ	
76	ヒメオウギズイセン	
77	メリケンカルカヤ	
78	ハルガヤ	
79	シロガネヨシ	
80	オオクサキビ	
81	キシウスズメノヒエ	
82	セイバンモロコシ	
83	アメリカヤガミスゲ	
84	ツルドクダミ	
85	ツルムラサキ	
86	フヨウ	
87	ヤナギバルイラソウ	
88	カッコウアザミ、ムラサキカッコウアザミ	
89	シマズメノヒエ	
90	タチズメノヒエ	
適切な管理が必要な産業上重要な外来種 (産業管理外来種)		
91	キウイフルーツ	
92	ビワ	
93	ハリエンジュ	
94	外来クサフジ類	
95	ユスカガサ	
96	カモガヤ	
97	オニウシノケグサ	
98	ドクムギ属	
99	ネズミムギ(ドクムギ属)	
100	ホソムギ(ドクムギ属)	
101	ボウムギ(ドクムギ属)	
102	オオアワガエリ	
103	モウソウチクなどの竹類	
104	ナギナタガヤ	
105	ギネアキビ	
106	アメリカスズメノヒエ	
特別選定種		
107	アマゾンチカガミ	
108	ウチワゼニグサ	
109	メリケンキンソウ	
110	シラユキゲシ	
111	カロライナツユクサ	
112	外来ツルソバ(仮称:ヒマラヤツルソバ)	
113	イトアゼガヤ類似種	
114	ボンボンアザミ	
115	ヨシススキ	

侵入警戒種		
魚類		
1	カラドジョウ	
昆虫類		
2	アルゼンチンアリ	特
3	アカカミアリ	特
4	ヒアリ	特
5	ツマアカスズメバチ	特
6	クビアカツヤカミキリ	特
その他の無脊椎動物		
7	コモチカワツボ	
8	カラムシロ	
9	サキグロタマツメタ	
10	カワヒバリガイ	

哺乳類	8
鳥類	6
両生爬虫類	4
魚類	7
昆虫類	1
陸生節足動物	1
その他の無脊椎動物	10
植物	115
合計	152
特: 特定外来生物	

Ⅲ 侵略的外来種現地調査リスト(動物)

通し No.	分類群	和名	備考			香川県				国(環境省)				
			特定 外来生 物	分布		防除 対象 種	選定 理由	対策優先度要件※		選定 理由	対策優先度要件※		備考	
				県内 広域分 布種	県内 点在分 布種			県内 限定分 布種	被害の 深刻度		実効性・ 実行 可能性	被害の 深刻度		実効性・ 実行 可能性
【国外由来の外来種】														
総合的に対策が必要な外来種(総合対策外来種)														
緊急対策外来種														
1	哺乳類	アライグマ	○	○	-	-	◎	I, III	①④	⑤	I, II	①②③④	⑤	特定外来
2	哺乳類	ヌートリア	○	-	-	○	○	I, II, III	①④	⑤	I, III	①④	⑤	特定外来
3	爬虫類	カミツキガメ	○	-	○	-	◎	I, III	①④	⑤	I, III	①④	⑤	特定外来
4	爬虫類	ワニガメ	-	-	○	-	◎	I, III	①④	⑤	III, IV	/	/	定着予防外来種
5	爬虫類	アカミミガメ	-	○	-	-	△	I	①	⑤	I	①	⑤	旧要注意外来
6	魚類	ブルーギル	○	○	-	-	△	I, II	①②③④	⑤	I, II	①②③④	⑤	特定外来
7	魚類	オオクチバス	○	○	-	-	△	I, II	①②③④	⑤	I, II	①②③④	⑤	特定外来
8	陸生節足動物	セアカゴケグモ	○	-	○	-	○	III	④	⑤	III	④	⑤	特定外来
9	その他の無脊椎動物	アメリカザリガニ	-	○	-	-	-	-	-	-	I	①③	⑤	旧要注意外来
重点対策外来種														
10	哺乳類	カイウサギ(アナウサギ)	-	-	-	○	-	-	-	/	I	①③	/	-
11	哺乳類	ハクビシン	-	○	-	-	○	I, III	①④	⑤	III	①④	/	-
12	鳥類	ソウシチョウ	○	-	○	-	-	IV	-	-	I	①	/	特定外来
13	両生類	ウシガエル	○	-	○	-	△	I	①③	/	I	①③	/	特定外来
14	魚類	タイリクバラタナゴ	-	-	○	-	◎	I, II	①②③	⑤	I, II	①②③	/	旧要注意外来
15	魚類	カダヤシ	○	○	-	-	△	I, II	①③	/	I	①③	/	特定外来
16	魚類	ガー科全種	○	-	○	-	○	I, II, IV	①②③	⑤	I, III	①	/	特定外来
17	魚類	カムルチー	-	○	-	-	△	I, II	①②③	/	I	①	/	旧要注意外来
18	その他の無脊椎動物	スクミリンゴガイ	-	○	-	-	△	I, III	①④	⑤	III	④	/	旧要注意外来
19	その他の無脊椎動物	ハブタエモノアラガイ	-	○	-	-	-	I	①	/	IV	/	/	-
20	その他の無脊椎動物	コウロエンカワヒバリガイ	-	○	-	-	-	I	①	/	I, III	/	/	旧要注意外来
21	その他の無脊椎動物	タイワンシジミ	-	○	-	-	△	I	①	/	I	/	/	旧要注意外来
22	その他の無脊椎動物	シマメノウフネガイ	-	○	-	-	-	I	①	-	-	-	-	-
23	その他の無脊椎動物	シナハマグリ	-	-	-	○	○	II, III	②③④	-	-	-	-	-
その他の総合対策外来種														
24	哺乳類	クマネズミ	-	○	-	-	-	-	-	-	I, II	①②③④	⑤	-
25	哺乳類	ハツカネズミ	-	○	-	-	-	-	-	-	III	①④	/	-
26	哺乳類	ドブネズミ	-	○	-	-	-	-	-	-	I, III	①②③④	/	-
27	鳥類	コリンウズラ	-	-	-	○	-	IV	/	/	I	/	/	旧要注意外来
28	鳥類	コウライキジ(大陸産亜種)	-	-	-	○	-	IV	/	/	III	/	/	-
29	鳥類	コブハクチョウ	-	-	○	-	-	IV	/	/	I	/	/	-
30	鳥類	ヒゲガビチョウ	○	-	○	-	-	IV	/	/	IV	/	/	特定外来
31	鳥類	ハッカチョウ	-	○	-	-	-	IV	-	-	-	-	-	-
32	魚類	ソウギョ	-	-	○	-	-	I	/	/	I	/	/	旧要注意外来
33	その他の無脊椎動物	マツノザイセンチュウ	-	○	-	-	その他	I, III	/	/	I, III	/	/	-
34	その他の無脊椎動物	ムラサキイガイ	-	○	-	-	-	I	/	/	I, III	/	/	旧要注意外来
35	その他の無脊椎動物	ミドリイガイ	-	-	○	-	-	I	/	/	I, III	/	/	旧要注意外来
【国内由来の外来種、国内に自然分布域を持つ国外由来の外来種】														
総合的に対策が必要な外来種(総合対策外来種)														
重点対策外来種														
36	哺乳類	対馬以外のチョウセンイタチ	-	○	-	-	不明	不明	不明	不明	I	①	/	-
37	昆虫類	ビロキジラミ	-	○	-	-	◎	IV	-	-	-	-	-	-

IV 侵略的外来種現地調査リスト(植物)

通し No.	科名	和名	備考			香川県				国(環境省)				
			特定 外来生物	分布		防除 対象種	選定 理由	対策優先度要件※		選定 理由	対策優先度要件※		備考	
				県内 広域分布種	県内 点在分布種			県内 限定分布種	被害の 深刻度		実効性・ 実行 可能性	被害の 深刻度		実効性・ 実行 可能性
総合的に対策が必要な外来種(総合対策外来種)														
緊急対策外来種														
1	アカウキクサ	外来アゾラ類	○	○	-	-	△	I, II, IV	①③	⑤	I, IV	①③	⑤	特定外来 (一部)
2	ヒユ	ナガエツルノゲイトウ	○	-	-	○	○	II, IV	①②	⑤	II, IV, V	①②③④	⑤	特定外来
3	ウリ	アレチウリ	○	○	-	-	△	IV, V	①④	⑤	IV, V	①③④	⑤	特定外来
4	アリノトウグサ	オオフサモ	○	○	-	-	△	IV	①③	⑤	IV	①③	⑤	特定外来
5	ゴマノハグサ	オオカワヂシャ	○	-	○	-	○	I, IV	①③	⑤	I, IV	①③	⑤	特定外来
6	キク	オオキンケイギク	○	○	-	-	△	IV	①	⑤	IV	①③	⑤	特定外来
7	キク	ミズヒマワリ	○	-	-	○	○	IV	①②	⑤	II, IV	①②③	⑤	特定外来
8	キク	オオハンゴンソウ	○	-	○	-	○	IV	①	⑤	II, IV	①②③	⑤	特定外来
9	キク	ナルトサワギク	○	-	○	-	○	IV	①②	⑤	IV, V	①④	⑤	特定外来
10	サトイモ	ポタンウキクサ	○	-	○	-	○	II, IV	①③	⑤	II, IV	①②③	⑤	特定外来
重点対策外来種														
11	サボテン	ウチワサボテン属	-	-	-	○	-	-	-	-	II, IV	①②③	-	(旧要注意外来)
12	スイレン	ハゴロモモ	-	-	-	○	-	-	-	-	IV	①③	-	旧要注意外来
13	スイレン	園芸スイレン	-	○	-	-	△	II, IV	①③	-	IV	①③	-	-
14	アブラナ	オランダガラシ	-	○	-	-	-	-	-	-	IV, V	①③④	-	旧要注意外来
15	マメ	モリシマアカシア	-	-	-	○	-	-	-	-	II, IV	①②③	-	旧要注意外来
16	マメ	イタチハギ	-	○	-	-	-	-	-	-	II, IV, V	①②④	-	旧要注意外来
17	ニガキ	ニワウルシ	-	○	-	-	△	IV	①	-	IV	①③	-	-
18	アカバナ	コマツヨイグサ	-	○	-	-	-	-	-	-	II, IV	①②③	-	旧要注意外来
19	モクセイ	トウネズミモチ	-	-	○	-	○	I, IV	①	-	II, IV	①②	-	旧要注意外来
20	キョウチクトウ	ツルニチニチソウ	-	○	-	-	△	IV	①	-	IV	①③	-	-
21	ヒルガオ	外来ノアサガオ類	-	-	○	-	○	IV	①	-	IV	①③	-	-
22	クマツヅラ	シチヘンゲ	-	-	-	○	-	-	-	-	II, IV	①②	-	旧要注意外来
23	キク	オオブタクサ	-	-	○	-	-	-	-	-	IV	①③	-	旧要注意外来
24	キク	セイタカアワダチソウ	-	○	-	-	△	II, IV	①②③	-	II, IV	①②③	-	旧要注意外来
25	キク	オオアワダチソウ	-	-	-	○	-	-	-	-	II, IV	①②③	-	旧要注意外来
26	キク	外来性タンポポ種群	-	○	-	-	△	I, IV	①②③	-	I, II, IV	①②③	-	旧要注意外来
27	トチカガミ	オオカナダモ	-	○	-	-	△	IV	①	-	II, IV	①②③	-	旧要注意外来
28	トチカガミ	コカナダモ	-	○	-	-	△	IV	①	-	II, IV	①②③	-	旧要注意外来
29	ミスアオイ	ホテイアオイ	-	○	-	-	△	IV	①	-	II, IV	①②③	-	旧要注意外来
30	アヤメ	キシウブ	-	○	-	-	-	-	-	-	II, IV	①②③	-	旧要注意外来
31	ツユクサ	ノハカタカラクサ	-	○	-	-	△	IV	①	-	IV	①③	-	旧要注意外来
32	イネ	シナダレスズメガヤ	-	○	-	-	△	IV	①	-	IV	①③	-	旧要注意外来
33	イネ	チヨグズメノヒエ	-	○	-	-	△	IV	①	-	IV, V	①③④	-	-
34	カヤツリグサ	シュロガヤツメリ	-	-	○	-	-	-	-	-	II, IV	①②③	-	-
35	カヤツリグサ	メリケンガヤツリ	-	○	-	-	△	IV	①	-	IV	①③	-	旧要注意外来
36	スベリヒユ	ケツメクサ	-	○	-	-	-	-	-	-	II, IV	①②③	-	-
37	リュウゼツラン	アオノリュウゼツラン	-	-	-	○	-	-	-	-	II, IV	①②③	-	-
その他の総合対策外来種														
38	イワヒバ	コンテリクラマゴケ	-	-	-	○	-	-	-	-	IV	-	-	-
39	タデ	ヒメツルソバ	-	-	○	-	-	-	-	-	IV	-	-	-
40	タデ	ヒメスイバ	-	○	-	-	-	-	-	-	IV, V	-	-	-
41	タデ	ナガバギシギシ	-	○	-	-	-	-	-	-	I	-	-	-
42	タデ	エゾノギシギシ	-	○	-	-	-	-	-	-	I, II, IV	-	-	旧要注意外来
43	ナデシコ	ムシトリナデシコ	-	○	-	-	-	-	-	-	IV	-	-	-
44	ナデシコ	マンテマ	-	○	-	-	-	-	-	-	IV	-	-	-
45	ケシ	アツミゲシ	-	-	○	-	○	V	-	-	V	-	-	-
46	アブラナ	ハルザキヤマガラシ	-	-	-	○	-	-	-	-	II, IV	-	-	旧要注意外来
47	アブラナ	セイヨウカラシナ	-	○	-	-	-	-	-	-	IV	-	-	-
48	マメ	エニシダ	-	-	○	-	-	-	-	-	IV	-	-	-
49	マメ	アレチヌスビトハギ	-	○	-	-	-	-	-	-	IV	-	-	-
50	カタバミ	オオキバナカタバミ	-	-	○	-	-	-	-	-	IV	-	-	-
51	ウコギ	カミヤツデ	-	-	-	○	-	-	-	-	IV	-	-	-
52	アカネ	オオフタバムグラ	-	-	○	-	-	-	-	-	II, IV	-	-	旧要注意外来
53	ヒルガオ	アメリカネナシカズラ	-	○	-	-	-	-	-	-	IV	-	-	旧要注意外来
54	ヒルガオ	ホシアサガオ	-	○	-	-	-	-	-	-	IV, V	-	-	-
55	クマツヅラ	アレチハナガサ	-	○	-	-	-	-	-	-	IV	-	-	-
56	クマツヅラ	ヤナギハナガサ	-	○	-	-	-	-	-	-	IV	-	-	-
57	クマツヅラ	ダキバアレチハナガサ	-	○	-	-	-	-	-	-	IV	-	-	-
58	ナス	ヨウシュチョウセンアサガオ	-	-	○	-	-	-	-	-	V	-	-	旧要注意外来
59	ナス	ツノミチョウセンアサガオ	-	-	○	-	-	-	-	-	V	-	-	旧要注意外来
60	ナス	シロバナチョウセンアサガオ	-	-	○	-	-	-	-	-	V	-	-	旧要注意外来
61	ナス	ケチョウセンアサガオ	-	-	○	-	-	-	-	-	V	-	-	旧要注意外来
62	ゴマノハグサ	ウキアゼナ	-	-	-	○	-	-	-	-	IV	-	-	-
63	キク	ワタゲハナグルマ、ワタゲツルハナグルマ	-	-	-	○	-	-	-	-	IV	-	-	-
64	キク	ユウゼンギク	-	-	-	○	-	-	-	-	IV	-	-	-
65	キク	アメリカセンダングサ	-	○	-	-	-	-	-	-	IV, V	-	-	旧要注意外来
66	キク	栽培キク属	-	-	-	○	-	-	-	-	I	-	-	-
67	キク	ケナシヒメムカシヨモギ	-	○	-	-	-	-	-	-	IV	-	-	-
68	キク	ハルシャギク	-	○	-	-	-	-	-	-	IV	-	-	-
69	キク	ヒメジョオン	-	○	-	-	-	-	-	-	II, IV	-	-	旧要注意外来
70	キク	ペラペラヨメナ	-	-	-	○	-	-	-	-	IV	-	-	-
71	キク	フランスギク	-	○	-	-	-	-	-	-	II, IV	-	-	-
72	キク	アラゲハンゴンソウ	-	-	-	○	-	-	-	-	II, IV	-	-	-
73	キク	オオオナモミ	-	○	-	-	-	-	-	-	I, IV, V	-	-	旧要注意外来
74	ユリ	シンテツポウユリ	-	○	-	-	-	-	-	-	I	-	-	-

通し No.	科名	和名	備考			香川県				国(環境省)			
			特定 外来 生物	分布		防除 対象 種	選定 理由	対策優先度要件※		選定 理由	対策優先度要件※		備考
				県内 広域 分布種	県内 点在 分布種			県内 限定 分布種	被害の 深刻度		実効性・ 実行 可能性	被害の 深刻度	
75	ユリ	ハナニラ	-	○	-	-	-	-	-	IV	-	-	-
76	アヤメ	ヒメヒオウギズイセン	-	○	-	-	-	-	-	IV	-	-	-
77	イネ	メリケンカルカヤ	-	○	-	-	-	-	-	IV	-	-	旧要注意外来
78	イネ	ハルガヤ	-	○	-	-	-	-	-	IV	-	-	-
79	イネ	シロガネヨシ	-	-	○	-	-	-	-	IV	-	-	-
80	イネ	オオクサキビ	-	○	-	-	-	-	-	IV	-	-	-
81	イネ	キシュウスズメノヒエ	-	○	-	△	-	IV	-	IV, V	-	-	旧要注意外来
82	イネ	セイバンモロコシ	-	○	-	-	-	-	-	IV	-	-	-
83	カヤツリグサ	アメリカヤガミスゲ	-	-	○	-	-	-	-	IV	-	-	-
84	タデ	ツルドクダミ	-	-	○	-	-	-	-	II, IV	-	-	-
85	ツルムラサキ	ツルムラサキ	-	-	○	-	-	-	-	II, IV	-	-	-
86	アオイ	フヨウ	-	-	○	-	-	-	-	I	-	-	-
87	キツネノマゴ	ヤナギバルイラソウ	-	-	○	-	-	-	-	IV	-	-	-
88	キク	カッコウアザミ、ムラサキカッコウアザミ	-	-	○	-	-	-	-	IV	-	-	-
89	イネ	シマスズメノヒエ	-	○	-	-	-	-	-	IV	-	-	-
90	イネ	タチスズメノヒエ	-	○	-	△	-	IV, V	-	IV, V	-	-	-
適切な管理が必要な産業上重要な外来種(産業管理外来種)													
91	マタタビ	キウイフルーツ	-	-	○	-	-	-	-	IV	-	-	-
92	バラ	ビワ	-	○	-	-	-	-	-	IV	-	-	-
93	マメ	ハリエンジュ	-	○	-	-	-	-	-	II, IV	-	-	旧要注意外来
94	マメ	外来クサフジ類	-	○	-	-	-	-	-	IV	-	-	-
95	イネ	コヌカグサ	-	○	-	-	-	-	-	I, IV	-	-	-
96	イネ	カモガヤ	-	○	-	-	-	-	-	II, IV	-	-	旧要注意外来
97	イネ	オニウシノケグサ	-	○	-	-	-	-	-	II, IV	-	-	旧要注意外来
98	イネ	ドクムギ属	-	-	○	-	-	-	-	IV	-	-	旧要注意外来
99	イネ	ネズミムギ(ドクムギ属)	-	-	○	-	-	-	-	IV	-	-	旧要注意外来
100	イネ	ホソムギ(ドクムギ属)	-	-	○	-	-	-	-	IV	-	-	旧要注意外来
101	イネ	ボウムギ(ドクムギ属)	-	-	○	-	-	-	-	IV	-	-	旧要注意外来
102	イネ	オオアワガエリ	-	-	○	-	-	-	-	II, IV	-	-	旧要注意外来
103	イネ	モウソウチクなどの竹類	-	○	-	△	-	II, IV, V	-	II, IV, V	-	-	-
104	イネ	ナギナタガヤ	-	○	-	-	-	-	-	IV	-	-	-
105	イネ	ギネアキビ	-	-	○	-	-	-	-	II, IV	-	-	-
106	イネ	アメリカスズメノヒエ	-	○	-	-	-	-	-	II, IV	-	-	-
環境省のリストにないが、香川県で問題となりそうな侵略的外来種(特別選定種)													
99	トチカガミ	アマゾントチカガミ	-	○	-	△	-	II	②	-	-	-	-
100	セリ	タテバチドメグサ	-	-	○	○	-	II	②	-	-	-	-
101	キク	メリケンキンソウ	-	-	○	○	-	II	②	-	-	-	-
102	ケシ	シラユキゲシ	-	-	○	-	-	II, V	②	-	-	-	-
103	ツユクサ	カロライナツユクサ	-	○	-	-	-	III	④	-	-	-	-
104	タデ	外来ツルソバ(仮称:ヒマラヤツルソ)	-	-	○	-	-	I	②	-	-	-	-
105	イネ	イトアゼガヤ類似種	-	-	○	-	-	V	④	-	-	-	-
106	キク	ボンボンアザミ	-	-	○	-	-	V	②	-	-	-	-
107	イネ	ヨシススキ	-	-	○	-	-	IV	②	-	-	-	-

V 種の解説
1 緊急対策外来種

分類	防除対象	種名等	食肉目アライグマ科 アライグマ
哺乳類	◎	原産地	北米～中米
		選定理由	農作物や生活環境への被害だけでなく、小型動物の捕食、人畜共通の感染症の媒介が懸念される。
		生態的特徴	中型の哺乳類で、夜行性。果物や野菜、鳥類や昆虫、両生類等なんでも食べる雑食性。
		生息環境	農地、森林、人家など
		侵入経緯	愛玩動物として輸入された個体が、放逐、逃出しなどで拡散した。
		県内定着状況	県内で広域的に分布している。
		影響・被害	農作物や生活環境への被害だけでなく、小型動物の捕食、人獣共通の感染症の媒介の危険性が指摘される。
		防除方法等 特記事項	わな罠等での捕獲が可能であり、防除事業の補助対象として積極的に防除を行っている。 特定外来生物

分類	防除対象	種名等	齧歯目ヌートリア科 ヌートリア
哺乳類	○	原産地	南米
		選定理由	農作物への被害だけでなく、水生生物の捕食やため池の堤体にトンネル状の巣穴を掘るとい報告もあり、ため池の堤体崩壊につながる懸念がある。
		生態的特徴	目と耳は小さく、後足に水かき、尾は円筒状で水生生活に適す。水際を好み、草食性。
		生息環境	流れの緩やかな河川・湖、ため池、水路脇などに生息し、繁茂した植生に営巣する。
		侵入経緯	対岸の岡山県から大雨時等で河川で流下した個体が流れ着き分布を広げたと考えられる。
		県内定着状況	小豆島、豊島、丸亀市の本島などに限定的に分布しているが、本土側での目撃事例もある。
		影響・被害	水生生物の捕食や農作物への被害だけでなく、ため池の堤体にトンネル状の巣穴を掘るとい報告もあり、ため池の堤体の崩壊につながる。
		防除方法等 特記事項	わな罠等での捕獲が可能であり、防除事業の補助対象として積極的に防除を行っている。 特定外来生物

分類	防除対象	種名等	カメ目カミツキガメ科 カミツキガメ
爬虫類	◎	原産地	北米～南米
		選定理由	在来種との競合や捕食による水生動物への被害、咬傷による人的被害が懸念される。
		生態的特徴	1回に20～30個を産卵し、長寿命(飼育下で38年生存の記録)で、捕えようと陸上に上げると狂暴で極めて攻撃的になる。
		生息環境	ため池、水路、河川など滞水から緩やかな流れを好む。
		侵入経緯	愛玩用として輸入されたものが放逐、逃げ出したものと思われる。
		県内定着状況	県内でも緩川上流域や塩江町(内湯池周辺)などで発見されている。
		影響・被害	捕食による水生動物や在来カメ類への被害、人への咬傷の可能性もある。
		防除方法等 特記事項	魚のアラなどを入れたトラップにかかりやすいことから、ため池単位等で根絶させる。 特定外来生物

分類	防除対象	種名等	カメ目カミツキガメ科 ワニガメ
爬虫類	◎	原産地	北米
		選定理由	在来種との競合や水生動植物の被害だけでなく咬傷による人的被害が懸念される。
		生態的特徴	1回に20～30個を産卵し、長寿命(飼育下で38年生存の記録)で、捕えようと陸上に上げると狂暴で極めて攻撃的になる。
		生息環境	ため池、水路、河川など滞水から緩やかな流れを好む。
		侵入経緯	愛玩用として輸入されたものが放逐、逃げ出したものと思われる。
		県内定着状況	県内でも愛玩用に飼われていたものが、放流され(金倉川)、発見されるケースが増えてきた。
		影響・被害	捕食による水生動植物、在来カメ類への被害や、人への咬傷の可能性もある。
		防除方法等 特記事項	発見次第駆除する。 定着予防外来種

分類	防除対象	種名等	カメ目ヌマガメ科 アカミミガメ
爬虫類	△	原産地	北米～南米
		選定理由	在来種カメとの競合や捕食による在来水生動植物への被害、人畜共通の細菌感染(サルモネラ菌)による人的被害が懸念される。
		生態的特徴	昼行性で日光浴を好み、雑食性で他のカメの卵を食べる習性あり、繁殖力も旺盛。
		生息環境	ため池、河川、水路など多様な水環境に生息し、汚れた水質にも強い。
		侵入経緯	ミドリガメ、ゼニガメなどで愛玩用に輸入されたものが、放逐されたり、逃出したものである。
		県内定着状況	県内各地に分布している。
		影響・被害	在来種との競合や水生動植物への被害だけでなく、人へのサルモネラ菌感染の可能性もある。
		防除方法等 特記事項	広く生息するため、効率よく駆除することは困難。魚のアラ等を餌としたトラップを多数設置することである程度の捕獲が可能といわれる。 旧要注意外来種

分類	防除対象	種名等	スズキ目サンフィッシュ科 ブルーギル
魚類	△	原産地	北米
		選定理由	捕食による在来種への影響が懸念される。
		生態的特徴	純淡水魚で止水域を好む。小魚、水生昆虫、甲殻類、水草等何でも捕食する雑食性。特に魚類の卵や稚魚を好んで食べる。
		生息環境	ため池を中心に生息し、水草の繁茂する場所を好む。
		侵入経緯	1960年に移入された。
		県内定着状況	1968年に大阪府から高松市内の数ヶ所のため池に945個体が移植されたのが最初である。現在、平野部のため池を中心に広域的に定着している。
		影響・被害	捕食により在来種(特にニッポンバラタナゴなど)に大きな影響を与えている。
		防除方法等 特記事項	池干し等により、ため池単位での根絶は可能であるが、県内全域に広がることから、県下全域での根絶は困難と思われる。 特定外来種

分類	防除対象	種名等	スズキ目 サンフィッシュ科	オオクチバス(ブラックバス)
魚類	△	原産地	北米	
		選定理由	捕食による在来種への影響が懸念される。	
		生態的特徴	純淡水魚で止水域を好み、水生昆虫、甲殻類、両生類などを捕食する。	
		生息環境	止水域から緩やかな流れを好むことからため池を中心に生息している。	
		侵入経緯	1925年に食用や釣り目的で輸入されたが、1970年代から意図的な放流により全国に拡がる。また、密放流も行われたとも言われている。	
		県内定着状況	県内への侵入の経緯は不明であるが、1970年代には県内で確認されている。	
		影響・被害	捕食により在来種(特にニッポンバラタナゴなど)に大きな影響を与えている。	
		防除方法等	池干し等により、ため池単位での根絶は可能であるが、県内全域に広がることから、県下全域での根絶は困難と思われる。	
特記事項	特定外来種			

分類	防除対象	種名等	クモ目 ヒメグモ科	セアカゴケグモ
陸性節足動物	○	原産地	オーストラリアといわれている。	
		選定理由	在来種と競合や咬傷による人への健康被害(神経毒)の懸念がある。	
		生態的特徴	メスは、腹部に砂時計型の赤い斑紋があり、判別しやすいが、オスは小さく発見し難い。	
		生息環境	道路側溝の蓋の裏、公園などの花壇の植込み、自動販売機や配電盤などの内部等でメスと卵のうは発見されやすい。	
		侵入経緯	1995年に初めて確認されたが、資材などに紛れて侵入したと思われる。	
		県内定着状況	県内では2009年に初めて確認されて以降、現在、15市町で確認されている。	
		影響・被害	在来のクモ類との競合や咬傷による人への健康被害の可能性がある。	
		防除方法等	発見次第殺虫剤などで駆除する。	
特記事項	特定外来生物			

分類	防除対象	種名等	十脚目 アメリカザリガニ科	アメリカザリガニ
その他の節足動物	一	原産地	北米	
		選定理由	稲の苗等の捕食、水田・用水路等の畔側壁の破壊	
		生態的特徴	淡水生であり、ため池などの止水域を好むが、小河川や水路などの緩やかな流水でも生息する。	
		生息環境	ため池、水田、水路、河川など	
		侵入経緯	1927年ウシガエルのエサ用として持ち込まれたものが、逸出したものと思われるが、教材やペットとして拡大したと考えられる。	
		県内定着状況	本県に持ち込まれた正確な年代や経路は不明であるが、現在、県内の多くのため池、用水路等に広域的に定着している。	
		影響・被害	移入されてから長期間経ているため、一部地域では生態系になじんでいるように思われるが、旺盛な雑食性のため生物多様性の保全の観点から注意が必要である。なお、本県には日本在来のザリガニは見られずすべて移入種のアメリカザリガニである。	
		防除方法等	発見次第駆除するとするが、県内全域に広がっており完全な根絶は困難と思われるが、ため池単位等の局地的な根絶であれば可能である。	
特記事項	旧要注意外来種			

分類	防除対象	種名等	サンショウ目 アカウキクサ科	外来アゾラ類
植物	△		アメリカオオアカウキクサ(アブラ・クリスターダ)、ニシノオオウキクサ、両種の雑種のアイオオアカウキクサがある。香川県では、アイオオアカウキクサが普通種で、ニシノオオアカウキクサは稀である。	
		原産地	北米～南米	
		選定理由	侵入後、一気に水面を覆い尽くし、在来の水生植物を被圧し、衰退させる懸念がある。	
		生態的特徴	小型の浮遊植物、1～2年生で葉は楕円で無枝柄、葉は秋に赤くなる。一年を通じて赤い系統もある。水面を覆うように繁茂する。空中窒素固定するラン藻と共生するため、繁茂すると富栄養化を引起す。	
		生息環境	水田、休耕地、ため池などの止水域。最近では河川の止水域にも進出している。	
		侵入経緯	合ガモ農法に伴って合ガモの餌飼料やマルチング用、緑肥用に導入され、水鳥の脚などに付着して分布拡大しているといわれ、1990年代から拡がる。	
		県内定着状況	県内では、アイオオアカウキクサは、2005年11月に三豊市財田町での記録があり、ニシノオオアカウキクサは、2005年8月に記録されている。水田等からの逸出や、野鳥や養魚・遊漁関係による持ち運びで県内に拡散した様子。	
		影響・被害	水面を覆い尽くすことで在来の水生植物と競合し、駆逐する。	
防除方法等	導入を避けたり、浮遊個体の流出を防ぐ工夫、水田などではアイガモに食べつくさせる等。			
特記事項	アメリカオオアカウキクサは特定外来生物			

分類	防除対象	種名等	ナデシコ目 ヒユ科	ナガエツルノゲイトウ
植物	○	原産地	南米	
		選定理由	在来種との競合や水面を覆い尽くして在来水生植物に影響を与える懸念がある。	
		生態的特徴	水辺の湿った環境に生える多年草で、茎の下部が水没することもある。各節から発根再生し、抽水状態、切れ藁状態でも再生する。分枝による栄養繁殖が旺盛である。	
		生息環境	ため池や河川	
		侵入経緯	アクアリウム等観賞用に導入された後、逸出したと考えられる。1989年に兵庫県で定着記録があり、現在、本州から沖縄にかけて広がる。	
		県内定着状況	県内では2011年10月に東かがわ市のため池や河川に侵入し、2019年12月にさぬき市でも確認され、県内に拡大し始めている恐れがある。	
		影響・被害	水面を覆い尽くすことで、在来種と競合し、駆逐するなど、在来の水生植物に影響を与える。	
		防除方法等	分枝を残さず駆除することであるが、陸上に侵入したものは、再生しないよう地下部を全て掘り取る。	
特記事項	特定外来生物			

分類	防除対象	種名等	ウリ目ウリ科	アレチウリ
植物	△	原産地	北米	
		選定理由	河川敷などでの在来種や、畑作物などとの競合が懸念される。	
		生態的特徴	日当りの良い河川敷や圃場や耕作放棄地などを好む1年生のつる性で、果実には鋭い棘があり、1株当たり400～500の種子をつける。	
		生息環境	河川、圃場、耕作放棄地、林縁など	
		侵入経緯	1952年に移入が確認された。北米からの輸入大豆に種子が混入した様子で全国に広がる。	
		県内定着状況	県内には1969年6月に飯山町での記録がある。最初は家畜飼料に混入してきたと見られるが、河川域に侵入してからは、急速に県内に拡大し、最近では海浜部にまで分布が拡大している。	
		影響・被害	河川敷などでの在来種や、畑作物などとの競合が懸念される。	
		防除方法等	1年草であり、種子が結実する迄に刈取り除去する事で、ある程度抑制できる。	
		特記事項	特定外来生物	

分類	防除対象	種名等	ユキノシタ目アリトウグサ科	オオフサモ
植物	△	原産地	南米	
		選定理由	在来種との競合により、在来水生植物への影響が懸念されるとともに、河川や水路で洪水時の水流阻害が懸念される。	
		生態的特徴	多年生で雌雄異株。現在、日本では雌株のみの地下茎で栄養繁殖を繰り返し、冬も枯れずに越冬する。	
		生息環境	ため池、河川、水路、出水などの水域	
		侵入経緯	雌株のみを観賞用水草として輸入されたり、河川工事やピオトープに用いるために植栽された。	
		県内定着状況	県内でも、観賞用水草として栽培されていたものが投棄されたりして、綾川流域ではかなり古くから見られたという。、養魚・遊魚関係による持ち運びにより県内に広く拡散したと思われる。	
		影響・被害	在来種との競合により、在来水生植物へ影響を与えるとともに、河川や水路で洪水時の水流阻害があり得る。	
		防除方法等	抜き取り、刈り取るものとするが、節のある茎の断片だけでも繁殖するので、これらの断片も回収する。	
		特記事項	特定外来生物	

分類	防除対象	種名等	シソ目オオバコ科	オオカワジシャ
植物	○	原産地	ヨーロッパ・アジア北部	
		選定理由	希少種であるカワジシャとの競合だけでなく、交雑により雑種のホナガカワジシャ <i>Veronica × myriantha</i> に置き換えられる懸念がある。	
		生態的特徴	多年生の抽水～湿性植物で岸辺に生育し、根茎を伸ばして繁殖し、茎葉の断断から再生する。	
		生息環境	河川、水路	
		侵入経緯	侵入経路は不明であるが、1920年代に確認後、1980年代から広がった。	
		県内定着状況	最初の記録は、2009年4月丸亀市で、その後土器川、御坊川、綾川、財田川などほぼ県内全域に拡散しており、2020年には鴨部川、金倉川、高瀬川でも確認された。坂出市綾川ではカワジシャと混生しており、雑種のホナガカワジシャ <i>Veronica × myriantha</i> が確認されている。	
		影響・被害	希少種であるカワジシャとの競合や交雑することで希少種の遺伝子的攪乱が起こっている。	
		防除方法等	抜き取ることで防除できるが、根茎や断片からも再生するのでそれらも残さず駆除する。	
		特記事項	特定外来生物	

分類	防除対象	種名等	キク目キク科	オオキンケイギク
植物	△	原産地	北米	
		選定理由	河川敷では、在来種のカワラサイコやカワラナデシコ等との競合が懸念される。	
		生態的特徴	多年生で、5月から7月にかけて黄色い花を着け、河川敷、道路沿いなどに大群落をつくる。	
		生息環境	河川、ため池の堤、道端等	
		侵入経緯	1880年代に移入され、観賞用に栽培、道路法面の緑化やワイルドフラワーに用いられたものが逸出・野生化	
		県内定着状況	正確な野生化の記録は無いが、1977年に琴南町美合で逸出したのが最初の記録であり、既にこの時期に定着していたといわれている。他に高松市仏生山町の逸出が掲載されている。最初は、観賞用に栽培されていたものが逸出し、野生化したものであったが、その後道路法面緑化や修景用に大規模に種子吹付けが実施され、急速に県内に拡大した。現在県内の到る所に生育している。	
		影響・被害	河川敷では、在来種のカワラサイコやカワラナデシコと競合し、駆逐する。	
		防除方法等	開花前に抜き取るか、刈り取る。	
		特記事項	特定外来生物	

分類	防除対象	種名等	キク目キク科	ミズヒマワリ
植物	○	原産地	中米～南米	
		選定理由	在来水生植物との競合や河川の水流通阻害が懸念される。	
		生態的特徴	多年生の抽水植物で流れの緩やかな水辺に生育し、訪花昆虫(チョウ、ハナアブ、ハエなど)に対する誘引力が強い。	
		生息環境	河川、水路	
		侵入経緯	観賞用水草として栽培されていたものが、投棄されて広がったものと思われる。	
		県内定着状況	県内では、2015年にさぬき市造田で確認され、その後、鴨部川で拡散している。また、2019年には多度津町の弘田川でも生育が確認され、2020年には鴨部川周辺の用水路等でも確認されている。	
		影響・被害	在来水生植物との競合や河川などでの水流阻害の発生。	
		防除方法等	根ごと抜くことで駆除できるが、再生能力が強く、断片からも再生でき、短期間で増殖繁茂する事から、完全駆除は難しい。	
		特記事項	特定外来生物	

分類	防除対象	種名等	キク目キク科	オオハンゴンソウ
植物	○	原産地	北米	
		選定理由	在来の草本との競合が懸念される。	
		生態的特徴	多年生草本で、花期は7月～9月頃で10～14枚の黄色い花卉。耐寒性が強く、種間交配等で育成された園芸品種が多い。	
		生息環境	道端、畑地、河川敷等	
		侵入経緯	明治期に観賞用として輸入したものが、投棄・逸出したものと思われる。	
		県内定着状況	正確な野生化時期の記録は無いが、県内では1960年代までは栽培されていたが徐々に減少し、現在では逸出したものほとんど見られなくなった。	
		影響・被害	在来の草本との競合する。	
		防除方法等	結実前に抜き取るか、掘り取るが、残った地下部や埋蔵種子から再生するので、複数年の対応が必要である。	
		特記事項	特定外来生物	

分類	防除対象	種名等	キク目キク科	ナルトサワギク
植物	○	原産地	マダガスカル	
		選定理由	在来の草本と競合し、駆逐するだけでなく、家畜の中毒(アルカロイド毒性)が懸念される。	
		生態的特徴	多年生草本であり、1年中花を咲かせ、種子を風散布させることができる。	
		生息環境	道路法面(高速)や海岸線沿い、空地	
		侵入経緯	1976年に徳島県鳴門市で確認され、緑化資材に混入したとされている。	
		県内定着状況	2009年に東かがわ市で確認され、現在、高速道路と海岸線沿いに、徳島県境から高松市の間で見つかっている。点在状態で群生している場所は見つかっていないが、2020年に小豆島の県道でまとまって生育しているのが確認されている。	
		影響・被害	在来の草本と競合し駆逐するだけでなく、家畜の中毒を引き起こす。	
		防除方法等	結実前に根ごと抜きとることで駆除できる。	
		特記事項	特定外来生物	

分類	防除対象	種名等	オモダカ目サイモ科	ボタンウキクサ
植物	○	原産地	南アフリカ	
		選定理由	在来の水生植物との競合や繁茂による水流阻害や水質の低下が懸念される。	
		生態的特徴	浮遊性の多年生草本であり、日当たりのよい場所を好み、根茎や越冬芽による栄養繁殖が旺盛で耐塩性がある。	
		生息環境	ため池、河川など	
		侵入経緯	1920年代に観賞用に沖縄、小笠原に移入されたものが逸出、野生化したもので、関西では1990年代以降広がっている。	
		県内定着状況	最初の記録は1994年9月に多度津町の記録があるが、ほぼ同時期に県内に広く拡散した。観賞用に市販されていたことから、栽培地からの逸出や投棄されたり、養魚関係による持ち運びにより拡散した。2000年頃までは県内全域でみられたが、最近ではほとんど見かけなくなった。	
		影響・被害	在来の水生植物との競合や繁茂による水流阻害や水質の低下が考えられる。	
		防除方法等	走出枝が折れやすく、残った株から再生しないよう完全に除去する。	
		特記事項	特定外来生物	

2 重点対策外来種

分類	防除対象	種名等	ウサギ目ウサギ科	カイウサギ
哺乳類	—	原産地		
		選定理由		
		生態的特徴	地下に複雑に張り巡らせたトンネルを隠れ場所として、1頭のオスと複数のメスで縄張りを持つ。	
		生息環境	降水量の少ない、巣穴の掘りやすい排水力のある堅牢な土壌地。	
		侵入経緯	国内では、島嶼部に1950年～90年代にかけて放獣されたものが多い。	
		県内定着状況	正確な時期は不明であるが、ひとつの離島にのみ生息	
		影響・被害	私有地の離島で生息しており、容易に島外に拡散する可能性は低い。	
		防除方法等 特記事項	— —	

分類	防除対象	種名等	食肉目ジャコウネコ科	ハクビシン
哺乳類	○	原産地	東南アジアに分布し、パキスタン北部からインドシナ半島を経て中国南部、台湾、ボルネオ島、スマトラ島。	
		選定理由	県内に広く定着し、農業被害だけでなく、住居などへの侵入による被害が懸念される。	
		生態的特徴	雑食性で果実、種子を好む。夜行性で昼間は人家の屋根裏等で休息し、夜行動する。基本的に母仔で行動する。	
		生息環境	市街地から山間部まで	
		侵入経緯	台湾からの移入と、それ以外からも持ち込まれたと言われている。江戸時代に移入の記録がある。	
		県内定着状況	県内に広域的に分布している。	
		影響・被害	農作物や生活環境への被害だけでなく、小型動物の捕食等。	
		防除方法等 特記事項	わな罠等での捕獲が可能、防除事業の補助対象として積極的に防除を行っている。 —	

分類	防除対象	種名等	食肉目イタチ科	対馬以外のチョウセンイタチ
哺乳類	不明	原産地	中国	
		選定理由	在来種との競合が懸念される。	
		生態的特徴	夜行性で果実や穀類などの植物、ネズミ類や鳥類、昆虫類などを食べるが、野外では、在来種との識別が難しい。	
		生息環境	中山間の農村付近の農地、ため池、水路、森林	
		侵入経緯	毛皮採取目的で移入されたものが、逸出、放逐などで広がった。	
		県内定着状況	在来種との識別が困難なため詳細不明	
		影響・被害	在来種との競合が懸念される。	
		防除方法等 特記事項	捕獲 —	

分類	防除対象	種名等	スズメ目ソウシチョウ科	ソウシチョウ
鳥類	—	原産地	ヒマラヤ、ミャンマー、ベトナム、中国	
		選定理由	特定外来生物で、点状的な分布であるが、在来種との競合が懸念される。	
		生態的特徴	10羽ほどの群れを作り笹群落や高木下層を活発に移動して採餌したり、シジュウカラ類とも混群をつくる。	
		生息環境	低木層の発達した森林	
		侵入経緯	古くから愛玩用に輸入されていたものが逸出し野生化した。	
		県内定着状況	低山帯から讃岐山脈にかけて幅広く生息している。	
		影響・被害	在来種のニッチを奪う可能性が高い。	
		防除方法等 特記事項	— 特定外来生物	

分類	防除対象	種名等	無尾目アカガエル科	ウシガエル
両生類	△	原産地	北米	
		選定理由	昆虫、他のカエルをはじめとする多くの小動物が捕食されたり、ニホンヒキガエル、トノサマガエル、ダルマガエルなどの在来カエル類との競合が懸念される。	
		生態的特徴	夜行性で昼間は水草の中や水場周辺の茂みや窪地に隠れ、口に入る大きさのものなら何でも食べる。	
		生息環境	ため池、水路、河川など滞水から緩やかな流れ	
		侵入経緯	食用として1918年に持ち込まれる。餌としてアメリカザリガニも持ち込まれる。	
		県内定着状況	県内で広域的に分布している。	
		影響・被害	在来生物に対する捕食・競合	
		防除方法等 特記事項	警戒心が強く、捕獲しにくい。発見次第駆除する。また、イネの収穫後から翌春までに池干しを行い、幼生を全滅させる。 特定外来生物	

分類	防除対象	種名等	コイ目コイ科	タイリクバラタナゴ
魚類	◎	原産地	中国	
		選定理由	ニッポンバラタナゴと容易に交雑することや産卵母貝をめぐる競合が懸念される。	
		生態的特徴	雑食性で動物プランクトンや付着藻類を食べ、ドブガイ類などの生きた二枚貝の鰓に産卵する。	
		生息環境	平野部のため池、河川の氾濫	
		侵入経緯	1940年代前半に食用種として輸入されたハクレン等の種苗に混入したものが放流などで分布域を広げた。	
		県内定着状況	フナ類の種苗に混入して県内に移入し、ため池を中心に広域的に定着している。	
		影響・被害	ニッポンバラタナゴが絶滅の危機に瀕している。	
		防除方法等 特記事項	池干しで駆除する。 旧要注意外来種	

分類	防除対象	種名等	カダヤシ目カダヤシ科	カダヤシ
魚類	△	原産地	北米	
		選定理由	在来種との競合が懸念される。	
		生態的特徴	ミナミメダカより攻撃性が強く、雑食性で落下昆虫や動物プランクトンを捕食し、塩分や水の汚れにも比較的強い。	
		生息環境	流れの緩い河川や用水路	
		侵入経緯	日本脳炎などを媒介する蚊(ボウフラ)の駆除を目的に1913年以降各地に放流された。	
		県内定着状況	1967年に高松市内の河川に放流され、現在は小河川や用水路を中心に広域的に分布している。	
		影響・被害	ミナミメダカを駆逐する。	
		防除方法等	根絶は困難と考えるが、ミナミメダカを駆逐することから駆除が必要である。	
		特記事項	特定外来種	

分類	防除対象	種名等	ガー目ガー科	ガー科全種
魚類	○	原産地	北米	
		選定理由	捕食圧が強く、在来生物に大きな影響を与えることが懸念される。	
		生態的特徴	国内では最大種で全長2mを超える記録がある。肉食性で他の魚類や甲殻類を食べる。	
		生息環境	緩やかな流れの淡水域、汽水域に生息できる。	
		侵入経緯	観賞目的で飼育されていた個体が、大型化して飼育困難となり放逸されたものと考えられる。	
		県内定着状況	ため池に放逸されたものが近年数か所で発見されている。また、繁殖は確認されていないが越冬はしている。	
		影響・被害	在来生物を捕食する。	
		防除方法等	発見次第駆除する。	
		特記事項	特定外来生物	

分類	防除対象	種名等	スズギ目タイワンドジョウ科	カムルチー(ライギョ)
魚類	△	原産地	中国	
		選定理由	在来生物を捕食する等生態系への影響が懸念される。	
		生態的特徴	空気呼吸できるため、汚れた水や無酸素の水域でも生息可能。性質は極めて獰猛で、冬は冬眠状態で越冬する。	
		生息環境	ため池や河川の淀みなどの止水域、特に水草帯を好む。	
		侵入経緯	1923年頃に朝鮮半島から食用種として移入。その後全国に分布を拡大した。	
		県内定着状況	移入経路及び移入時期は不明であるが、ため池に広域的に分布している。	
		影響・被害	在来の水生生物を捕食する。	
		防除方法等	発見次第駆除するとするが、県内全域に広がっており、完全な根絶は困難と思われるが、池毎の根絶であれば可能と考えられる。	
		特記事項	旧要注意外来種	

分類	防除対象	種名等	カメムシ目キジラミ科	ビワキジラミ
昆虫類	◎	原産地	—	
		選定理由	本県の特産物であるビワに大きな被害を与え、急速に分布を拡大する懸念がある。	
		生態的特徴	アブラムシやコナジラミに近いもので、成虫で2~3mm程度のセミのような形態。	
		生息環境	ビワ栽培地	
		侵入経緯	2012年に徳島県で突然発見される。徐々に生息域を拡げつつあるが、苗木の移動によるものと思われる。	
		県内定着状況	本県では、2016年の東かがわ市への侵入から、小豆島を含め坂出市、善通寺市まで広がっている。	
		影響・被害	ビワ栽培へ大きな影響あり。	
		防除方法等	行政主導で、分布の情報収集を速やかに行い、農協もしくは農業経営者に速やかな防除を働きかける。	
		特記事項	—	

分類	防除対象	種名等	盤足目リngoガイ科	スクミリンゴガイ
その他の無脊椎動物	△	原産地	南米	
		選定理由	水稲、レンコンなどの農作物への被害が懸念される。	
		生態的特徴	鰓と肺臓器官を持ち、水中でも陸上でも生息でき、乾燥すると蓋を閉じ代謝を下げ長期生存できる。	
		生息環境	水田や用水路・ため池などの淡水域	
		侵入経緯	1980年代に食用目的や農家の副業として持ち込まれた。	
		県内定着状況	県内の水田を中心に広く分布している。	
		影響・被害	水稲への被害がある。	
		防除方法等	田植え時期を早めたり、水田の取水口に網を設置したり、水深の管理、銅資材による産卵防止など。	
		特記事項	旧要注意外来種	

分類	防除対象	種名等	有肺目モノアライ科	ハブタエモノアライガイ
その他の無脊椎動物	—	原産地	北米	
		選定理由	在来種であるモノアライガイとの競合が懸念されている。	
		生態的特徴	淡水産の巻貝で主に藻類をエサとし、有肺類で空気呼吸を行うが、水中で皮膚呼吸もしているといわれている。	
		生息環境	ため池や用水路	
		侵入経緯	観賞用の水草の移動に伴って持ち込まれたとされている。	
		県内定着状況	県下のほとんどの溜池に進入し、用水路を伝ってさらに生息範囲を広げている。	
		影響・被害	在来種との競合。	
		防除方法等	広域的に分布し根絶は困難と思われる。	
		特記事項	—	

分類	防除対象	種名等	イガイ目イガイ科 コウロエンカワヒバリガイ
その他の無脊椎動物	—	原産地	オーストラリア、ニュージーランド
		選定理由	水路、船舶、水利道具、漁具などに付着して汚損被害の懸念がある。
		生態的特徴	汽水産の二枚貝で護岸や岩場に付着する、1年程度の寿命で水質汚濁、塩分にも耐性がある。汚物を濾過して摂食する。
		生息環境	内湾、河口の潮間帯
		侵入経緯	1972年に岡山県児島湾で最初に発見される。バラスト水への混入、船体への付着
		県内定着状況	県内に広く分布しているが一時期に比べて勢力が弱まっているように思われる。
		影響・被害	水路などに付着して汚損被害の発生。
		防除方法等 特記事項	広域的に分布し根絶は困難と思われる。 旧要注意外来種

分類	防除対象	種名等	マルスダレカイ目シジミ科 タイワンシジミ
その他の無脊椎動物	△	原産地	中国、台湾
		選定理由	在来のマシジミとの競合、交雑による遺伝的攪乱の懸念がある。
		生態的特徴	淡水産の二枚貝、雌雄同体で自家受精可能、食用貝を洗う時に稚貝が流下して水路などに定着。
		生息環境	用水路やため池などの淡水域
		侵入経緯	1980年代の輸入シジミに由来するものと思われる。
		県内定着状況	県内に広く分布している。
		影響・被害	在来のマシジミとの競合、交雑による遺伝的攪乱
		防除方法等 特記事項	広域的に分布し根絶は困難と思われる。 旧要注意外来種

分類	防除対象	種名等	盤足目カリバガサ科 シマメノウフネガイ
その他の無脊椎動物	—	原産地	北米
		選定理由	大型の貝類(サザエ、アワビ)の貝殻に付着したり、カキ等と食性が競合することが懸念される。
		生態的特徴	海産巻貝の仲間です。宿主の貝に密集して付着し、宿主の排泄や海中の懸濁物を濾し集めて食べる。また、付着した貝の上で卵囊を生み孵化まで雌が殻内で保護する。
		生息環境	大型の貝類(サザエ、アワビ)の貝殻に付着
		侵入経緯	バラスト水への混入、船体への付着
		県内定着状況	県内に広域的に分布している。
		影響・被害	宿主に多量に寄生するため宿主の行動を妨げ、成長を阻害する。
		防除方法等 特記事項	駆除 —

分類	防除対象	種名等	マルスダレガイ目マルスダレガイ科 シナハマグリ
その他の無脊椎動物	○	原産地	中国
		選定理由	在来種のハマグリと交雑の懸念がある。
		生態的特徴	海産の二枚貝で、在来のハマグリと似るが、殻が厚く、より丸み強い。
		生息環境	内湾干潟の砂泥底
		侵入経緯	養殖時の浮遊幼生の逸出や潮干狩り用にシナハマグリを放流したともいわれる。
		県内定着状況	1970年代から記録がある。近年、観音寺市で本種とハマグリの変種個体が確認されている。ハマグリの変種として養殖されている。
		影響・被害	在来種との競合
		防除方法等 特記事項	蓄養池からの浮遊幼生の流出を、排水溝のフィルターで防止したり、局地的分布で在来種と判別して駆除する。 —

分類	防除対象	種名等	ナデシコ目サボテン科 ウチワサボテン属
植物	—	原産地	中米
		選定理由	海岸砂浜や河原の在来植物と競合し、駆逐する懸念がある。
		生態的特徴	多肉質の多年生の草本で、茎幹や枝は扁平、円柱状の茎節からなる。ウチワサボテン属は約250種あり小型で横に這うものから、大型木本性の茎を持つものもある。
		生息環境	海岸砂浜、海岸岩上、河原
		侵入経緯	観賞用として栽培されていたものが、投棄されて広がったものと思われる。
		県内定着状況	県内では、1985年に豊浜町で確認されて以降、観賞用に栽培されていたものが空き地や海岸で投棄され生育している。また、観音寺市股島では園芸出荷用に栽培していたものが放棄され、数系統のものが野生化している。
		影響・被害	海岸砂浜や河原の在来植物と競合し、駆逐する。
		防除方法等 特記事項	皮手袋、厚い服や靴で、除去作業を行い、除去したものは深く埋めるか、焼却する。除草剤は果実が生長する前が有効で、茎に注入する。 旧要注意外来種

分類	防除対象	種名等	スイレン目ハゴロモモ科 ハゴロモモ
植物	—	原産地	北米
		選定理由	在来の水生植物のカガブタ、ヒシと競合し、駆逐する懸念があるため。
		生態的特徴	多年生の沈水植物で、水中茎が根元で分枝し株状になる。水質がやや汚濁した環境でも見られる。
		生息環境	ため池、流れの緩やかな河川
		侵入経緯	金魚藻として観賞用水草として導入され、栽培されていたものが投棄され、野生化したもの。
		県内定着状況	本県では1964年9月に高松市での記録後、2009年8月の観音寺市まで記録がなかったが、これも2011年には消失した。本県では定着性は低く、一時的な生育しか見られない。
		影響・被害	在来の水生植物のカガブタやヒシと競合し駆逐する。
		防除方法等 特記事項	断片から拡がらないよう抜き取り、刈り取りを行う。 旧要注意外来種

分類	防除対象	種名等	スイレン目 スイレン科	園芸用スイレン
植物	△	原産地	ヨーロッパ	
		選定理由	大きな葉で遮光し、水生動植物に影響を与え、オニバス、ジュンサイ等と競合し、駆逐する懸念がある。	
		生態的特徴	浮葉性の多年生植物で、地下茎は塊根状となり、地下茎や塊根で繁殖する。	
		生息環境	ため池など	
		侵入経緯	観賞用に輸入したものが逸出、放逐されたものといわれる	
		県内定着状況	県内のため池に広域的に分布している。	
		影響・被害	大きな葉で遮光し、水生動植物に影響を与え、オニバス、ジュンサイ等と競合し、駆逐する。一度定着すると繁殖力が強く、除去するためには根茎を掘り取るしかなく、根絶させるのは厄介である。	
		防除方法等	特記事項	
		特記事項	—	

分類	防除対象	種名等	フウチョウソウ目 アブラナ科	オランダガラシ(クレソン)
植物	—	原産地	ヨーロッパ	
		選定理由	水辺に生育する在来植物と競合するだけでなく、繁殖が旺盛で各地で野生化して、河川、水路等の水流阻害が懸念される。	
		生態的特徴	抽水～沈水性の多年生草本、日当たりの良いところを好み、両性花で虫媒花とともに、根茎による繁殖力も強く、茎の節から容易に発根する。	
		生息環境	ため池、水路、河川、水田、出水	
		侵入経緯	1870年代に食用として輸入され栽培したものが逸出・野生化したものといわれる。	
		県内定着状況	1965年に豊中での採取記録がある。県内各地のため池で見られるが、ため池での大繁殖は見られないが、河川、出水、水路には繁殖地がある。	
		影響・被害	水辺に生育する在来植物との競合や水路河川での水流阻害。	
		防除方法等	根茎から容易に再生するため、抜き取り、刈り取りに際して根茎の断片を残さないようにする。	
		特記事項	旧要注意外来種	

分類	防除対象	種名等	マメ目 マメ科	モリシマアカシア
植物	—	原産地	オーストラリア	
		選定理由	成長が早く、在来の先駆樹種と競合することが懸念される。	
		生態的特徴	常緑高木で種子の生産量が多い。また、窒素固定やアレロパシー作用で土壤環境に影響を及ぼす。	
		生息環境	二次林、崩壊地での初期緑化地	
		侵入経緯	観賞用の園芸植物であるが、一時期はげ山復旧の肥料木として植栽された。	
		県内定着状況	一時期はげ山復旧工事の肥料木として植栽され、小豆島、直島、本島などに残存しているが、増殖拡散しているような事例は無い。	
		影響・被害	成長が早く、在来の先駆樹種との競合	
		防除方法等	結実前に抜き取り、掘り取る。または伐採し、切株の切り口に除草剤塗布処理を行う。	
		特記事項	旧要注意外来種	

分類	防除対象	種名等	マメ目 マメ科	イタチハギ
植物	—	原産地	北米	
		選定理由	在来種との競合が懸念される。	
		生態的特徴	落葉低木で成長が早く、暑さや乾燥にも強く、空中窒素固定作用を持つ	
		生息環境	道路法面、砂防、治山事業などの緑化施工地	
		侵入経緯	1912年に観賞用に輸入され、1940年代以降に緑化の肥料木として使用されてきた。	
		県内定着状況	一時期はげ山復旧の肥料木として植栽され、県内に広く点在しているが、法面緑化工として種子吹付けされたような場所を除き、群生する様な場所は無い。	
		影響・被害	在来種との競合	
		防除方法等	実生の除去や若木の抜き取りや掘り取り。または、伐採し、切株の切り口に除草剤塗布処理を行う。	
		特記事項	旧要注意外来種	

分類	防除対象	種名等	ムクロジ目 ニガキ科	ニワウルシ
植物	△	原産地	中国	
		選定理由	河川敷や二次林等に生育する在来樹木と競合する懸念がある。	
		生態的特徴	落葉高木で河川敷や空地などに先駆樹として侵入し、生長が早く、アレロパシー効果で他の植物の成長を阻害する。	
		生息環境	放棄耕作地や森林伐採跡の放棄地、河川敷、道路端等	
		侵入経緯	庭木、街路樹として導入、養蚕にも使われたともいわれる。	
		県内定着状況	正確な野生化時期の記録は無いが、戦前から古い逸出種と見られ、1965年5月に観音寺市で採集した記録がある。県内に広く生育しており、放棄耕作地や放棄果樹園、森林伐採跡放棄地、河川縁、道路縁等に群生し、純林を形成している場所もある。	
		影響・被害	在来樹木との競合	
		防除方法等	稚樹の抜き取りや伐採し、切株の切り口に除草剤塗布処理を行う。	
		特記事項	旧要注意外来種	

分類	防除対象	種名等	フトモモ目 アカバナ科	コマツヨイグサ
植物	—	原産地	北米	
		選定理由	海岸砂浜の在来植物と競合し、駆逐することが懸念される。	
		生態的特徴	一年生～短命な多年草で海岸のほか、河原や砂地、道端にも生育し、匍匐して広がる。	
		生息環境	海岸砂浜、埋立地、河川敷、道路端など	
		侵入経緯	1910年頃に移入されているらしいが、戦後急速に拡大したとの記録がある。	
		県内定着状況	1953年6月に坂出市で確認された後、急速に拡大し、現在では海岸部を中心に全県的に分布している。花径、葉の形態の変異が大きい、ここでは細分していない。	
		影響・被害	在来の海浜植物種との競合や駆逐	
		防除方法等	抜き取り	
		特記事項	旧要注意外来種	

分類	防除対象	種名等	シソ目モクセイ科	トウネズミモチ
植物	○	原産地	中国	
		選定理由	在来種のネズミモチとの競合や駆逐が懸念される。	
		生態的特徴	常緑の亜高木で鳥による種子散布で広がっている。	
		生息環境	公園や道路植栽帯、街路への植栽、河川などの開けた環境	
		侵入経緯	植栽用に明治初期に移入されているらしいが、戦後急速に拡大した。	
		県内定着状況	庭園や公園、高速道路法面に緑化木として植栽されていたものが結実し、野鳥に食べられ逸出したものが時々見られ、東かがわ市から観音寺市まで点在している。	
		影響・被害	在来種のネズミモチとの競合や駆逐。	
		防除方法等 特記事項	実生、稚樹の抜き取り、伐採と切株の切り口への除草剤塗布処理を行う。 旧要注意外来種	

分類	防除対象	種名等	リンドウ目キョウチクトウ科	ツルニチニチソウ
植物	△	原産地	ヨーロッパ	
		選定理由	二次林林床、海岸砂浜などに生育し、在来植物との競合が懸念される。	
		生態的特徴	つる性の多年生草本で様々な環境に適応でき、種子はあまりつづらないが、匍匐して広がる。	
		生息環境	森林、河川敷、海岸砂浜等で生育する。	
		侵入経緯	観賞用に移入されたものが、投棄、放逐されて広がった。	
		県内定着状況	既に、広く県内に拡がっており、人為の入らない様な場所では群生している所もある。	
		影響・被害	二次林林床、海岸砂浜などに生育する在来植物と競合し、駆逐する。	
		防除方法等 特記事項	実生は抜き取り。小規模な侵入は茎や根を残さないよう掘り取る。 -	

分類	防除対象	種名等	ナス目ヒルガオ科	外来ノアサガオ類
植物	○	原産地	熱帯アメリカ	
		選定理由	海岸や林縁に生育する在来植物との競合や駆逐が懸念される。	
		生態的特徴	つる性の1年生～多年生草本で、茎の断片や切株から再生できる。	
		生息環境	人里近くの道路縁、林縁、河川敷等	
		侵入経緯	江戸時代末に観賞用に移入したものが逸出して野生化	
		県内定着状況	2013年10月に高松市庵治町で初記録。これ以前から観賞用に栽培されていたオーシャンブルー系のものが逸出して野生化して海岸部や廃屋、放棄地等で群生している事がある。	
		影響・被害	海岸や林縁に生育する在来植物と競合し駆逐する。	
		防除方法等 特記事項	抜き取るか掘り取る。 -	

分類	防除対象	種名等	シソ目クマツヅラ科	シチヘンゲ(ランタナ)
植物	-	原産地	南米	
		選定理由	海岸に生育する在来種との競合だけでなく、種子に毒があるとされており誤食が懸念される。	
		生態的特徴	半つる性の常緑低木で、立地条件に対する適応性が高く、多少の日陰でもよく生育し、多数の園芸品種がある。	
		生息環境	畑地、樹園地、牧草地、道路端等	
		侵入経緯	江戸時代末期に観賞用として移入したものが逸出したり、投棄されたもの。	
		県内定着状況	県内では、人家周辺で点々と分布しているが、群生するまでには到っていない。	
		影響・被害	海岸に生育する在来種との競合だけでなく、誤食による中毒。	
		防除方法等 特記事項	結実前に地下部も含めて抜き取り、刈り取る。伐採した切株の切り口に除草剤塗布処理を行う。 旧要注意外来種	

分類	防除対象	種名等	キク目キク科	オオブタクサ
植物	-	原産地	北米	
		選定理由	湿地や河原に生育する場合、在来植物のヨシ、スゲとの競合や駆逐が懸念される。	
		生態的特徴	大型の一年生草本で、3mになることもある。肥沃で湿った所を好む	
		生息環境	湿地、河原、樹園地、牧草地、道路端、海岸等	
		侵入経緯	1952年に移入され、飼料穀物や豆類に混入	
		県内定着状況	1964年に観音寺市で最初に発見されたが、それ以降現在まで散発的に報告されているが、群生の事例は報告されていない。	
		影響・被害	湿地や河原に生育する場合、在来植物のヨシ、スゲとの競合や駆逐。	
		防除方法等 特記事項	開花直前に集中した刈り取り。 旧要注意外来種	

分類	防除対象	種名等	キク目キク科	セイタカアワダチソウ
植物	△	原産地	北米	
		選定理由	在来植物のススキ、ヨシ等との競合や駆逐が懸念される。	
		生態的特徴	多年生草本で、大きいものは高さ3m程度になる。長い地下茎で繁殖する。また、アレロパシー作用で周辺の植物の成長を抑制する。	
		生息環境	河川敷、耕作放棄地、道路端、空地など	
		侵入経緯	1900年頃に観賞用や蜜源植物として移入され、戦後に分布拡大。	
		県内定着状況	正確な帰化時期の記録は無いが、1930年代に善通寺市で確認されたという。県内に普通に見られ、一時期は群生地が見られたが、最近では群生地はあまり見られなくなった。	
		影響・被害	在来植物のススキ、ヨシ等との競合や駆逐。	
		防除方法等 特記事項	年2回以上の刈り取り、抜き取り。 旧要注意外来種	

分類	防除対象	種名等	キク目キク科	オオアワダチソウ
植物	—	原産地	北米	
		選定理由	在来草本植物との競合が懸念される。	
		生態的特徴	セイタカアワダチソウほど大きくならないが、多年生草本で地下茎が長くなり、繁殖する。	
		生息環境	河川敷、耕作放棄地、道路端、空地など	
		侵入経緯	観賞用に明治時代に移入したのから野生化	
		県内定着状況	過去に志度町、高松市、坂出市、宇多津町、仲南町、財田町、豊浜町で記録されているが、最近の報告事例は無い。	
		影響・被害	在来草本植物との競合。	
		防除方法等	結実前の刈り取りや地下茎を含めた抜き取り。	
		特記事項	旧要注意外来種	

分類	防除対象	種名等	キク目キク科	外来性タンポポ種群(セイヨウタンポポ)
植物	△	原産地	ヨーロッパ	
		選定理由	在来種のカンサイタンポポとの競合、交雑することで遺伝子攪乱の懸念がある。	
		生態的特徴	多年生草本で日当たりのよい場所を好み、在来種と比べて攪乱が激しく、アルカリ性で貧弱な乾燥土壌で生育できる。	
		生息環境	空き地、畑地、道路端、河川敷、人家周辺、市街地	
		侵入経緯	1904年に食用や飼料として移入したものが逸出、放逐され野生化した。	
		県内定着状況	セイヨウタンポポの正確な帰化時期の記録は無いが、1955年以前に高松市幸町で確認されており、以降県内に広がり、現在は、県内各地で見られる。	
		影響・被害	在来種のカンサイタンポポとの競合、交雑することで遺伝子攪乱する。	
		防除方法等	抜き取り、刈り取り、耕耘	
		特記事項	旧要注意外来種	

分類	防除対象	種名等	キク目キク科	外来性タンポポ種群(アカミタンポポ)
植物	△	原産地	ヨーロッパ	
		選定理由	在来種のカンサイタンポポとの競合、交雑することで遺伝子攪乱の懸念がある。	
		生態的特徴	多年生草本でセイヨウタンポポと比べて果実が赤っぽいこと、頭花の径がやや大きいことで、識別できる。	
		生息環境	空き地、畑地、道路端、河川敷、人家周辺、市街地	
		侵入経緯	食用や飼料として移入したものが逸出、放逐され野生化した。	
		県内定着状況	最初の記録は、1978年3月に詫間町で記録され、現在、県内に広く分布している。	
		影響・被害	在来種のカンサイタンポポとの競合、交雑することで遺伝子攪乱する。	
		防除方法等	抜き取り、刈り取り、耕耘	
		特記事項	旧要注意外来種	

分類	防除対象	種名等	オモダカ目トチカガミ科	オオカナダモ
植物	△	原産地	南米	
		選定理由	クロモ等の在来種との競合や駆逐だけでなく、繁茂して水流阻害の懸念がある。	
		生態的特徴	沈水性の多年生草本で、日当たりの良い浅い滞水域を好み、低温、アルカリに耐えられる。断片から再生でき分布を広げる。	
		生息環境	ため池、水路、河川	
		侵入経緯	大正時代に観賞用、植物の実験用として移入され、1970年代に琵琶湖で大繁茂した。	
		県内定着状況	1982年に高松市元山町で最初に記録され、現在、県内の溜め池や河川、出水等の水域に広く見られるが、拡散速度はコカナダモほど急激でない。	
		影響・被害	クロモ等の在来種との競合や駆逐だけでなく、繁茂して水流阻害を起こす。	
		防除方法等	異常繁殖した後、衰退して安定または消滅する傾向にある。また、水管理ができるのであれば、水抜きをして枯死させる。	
		特記事項	旧要注意外来種	

分類	防除対象	種名等	オモダカ目トチカガミ科	コカナダモ
植物	△	原産地	北米	
		選定理由	クロモ等の在来種との競合や駆逐だけでなく、繁茂して水流阻害の懸念がある。	
		生態的特徴	常緑の多年生の沈水植物で、日当たりの良い浅い滞水域を好み、在来種が枯衰する冬でも越冬できる。切れ藻による栄養繁殖により分布を広げている。在来種と棲み分けて共存する可能性がある。	
		生息環境	ため池、水路、河川	
		侵入経緯	植物の実験用として移入	
		県内定着状況	1981年、最初に善通寺市弘田川で記録されて以後、急激に県内全域に拡散した。一時期、水域全面を覆う様な場所もあったが、現在、その様な事例はあまり見られない。	
		影響・被害	クロモ等の在来種との競合や駆逐だけでなく、繁茂して水流阻害を起こす。	
		防除方法等	刈り取りによるが、植物体の断片から再生するので、それらもあわせて除去する必要がある。	
		特記事項	旧要注意外来種	

分類	防除対象	種名等	ツユクサ目ミズアオイ科	ホテイアオイ
植物	△	原産地	南米	
		選定理由	在来の水生植物との競合、水流阻害、冬季に枯死した個体の腐敗による水質悪化が懸念される。	
		生態的特徴	多年生の浮遊植物で、日当たりの良い温暖な場所を好む。走出枝を伸ばして子株を増やす。	
		生息環境	ため池、水路、河川	
		侵入経緯	明治中期に観賞用、家畜飼料として移入。	
		県内定着状況	正確な野生化時期の記録は無いが、1950年代後半には稀なものであったが、1982年観音寺市で採集された記録がある。水質浄化として意図的に投入された事も拡大の一因である。現在、県内の溜め池や河川、出水等の水域で見られるが、目立たなくなっている。	
		影響・被害	在来の水生植物との競合、水流阻害、冬季に枯死した個体の腐敗による水質悪化。	
		防除方法等	物理的な除去(越冬株の除去)	
		特記事項	旧要注意外来種	

分類	防除対象	種名等	キジカクシ目アヤメ科 キシウブ
植物	—	原産地	ヨーロッパから西アジア
		選定理由	水辺の在来種と競合し、駆逐する恐れがある。
		生態的特徴	多年生の抽水植物で日当たりの良い水際や湿地を好むが、やや乾燥しても生育できる。太い地下茎があり、分枝して繁殖する。
		生息環境	ため池、用水路、河川、休耕田
		侵入経緯	明治時代に観賞用として移入
		県内定着状況	正確な野生化時期の記録は無いが、1960年代には珍しくなかった。現在、県内に広く見られるが、群生する事は稀である。
		影響・被害	水辺の在来種と競合し、駆逐する恐れがある。
		防除方法等	再生しないように根茎ごと抜き取る。
		特記事項	旧要注意外来種

分類	防除対象	種名等	ツクサ目ツクサ科 ノハカタカラクサ 別名:トキワツクサ
植物	△	原産地	南米
		選定理由	二次林の林床の在来草本植物と競合し、マット状に広がり、駆逐する。
		生態的特徴	多年生草本で密集したマット状に広がり、やや湿った日陰に生育する。
		生息環境	林縁、林内、人家周辺
		侵入経緯	観賞用に昭和初期に移入されたものが逸出し、野生化している。
		県内定着状況	正確な野生化時期の記録は無いが、最も古い標本として1964年に観音寺市で採集された記録がある。現在では、県内各地に拡散し、群生地も報告されている。
		影響・被害	二次林の林床の在来草本植物と競合し、マット状に広がり、駆逐する。
		防除方法等	除草し、住宅地から外に出さない。
		特記事項	旧要注意外来種

分類	防除対象	種名等	イネ目イネ科 (ウィービングラブグラス) シナダレスズメガヤ
植物	△	原産地	南アフリカ
		選定理由	在来種との競合、河川敷での土砂の堆砂による環境改変の懸念がある。
		生態的特徴	多年草で叢生して密な大きな株となる。砂質土壌を好み、耐暑性と耐旱性は強い。
		生息環境	河川敷、道端、荒地
		侵入経緯	1959年に砂防や法面緑化用に移入したものが、逸出したもの。
		県内定着状況	正確な野生化時期の記録は無いが、古い標本として1965年に大野原町で採集した記録がある。この頃から広がり始めたものと思われ、砂防用、法面緑化用に導入されたものから逸出したものが道路縁や河川に侵入し、急速に県内に拡大した。
		影響・被害	在来種との競合、河川敷での堆砂
		防除方法等	種子ができる前に刈り取ったり、抜き取る。
		特記事項	旧要注意外来種

分類	防除対象	種名等	イネ目イネ科 チヨグズズメヒエ
植物	△	原産地	北米
		選定理由	在来種のアシカキ、サヤマカクサ等との競合やマット状に広がり、水面を覆い、水流阻害の懸念がある。
		生態的特徴	多年生の抽水から湿性植物、日当たりの良い肥沃な水際から湿地を好む。
		生息環境	ため池、河川、休耕田
		侵入経緯	1970年代に筑後地方で確認され、急激に分布を拡大。
		県内定着状況	最初の記録は、1985年に高松市春日川で、これ以前はキシウズズメヒエと混同されており、現在ではキシウズズメヒエ同様普通種である。
		影響・被害	在来種のアシカキ、サヤマカクサ等との競合やマット状に広がり、水面を覆い、水流阻害がある。
		防除方法等	抜き取り、刈取り
		特記事項	旧要注意外来種

分類	防除対象	種名等	イネ目カヤツリグサ科 シュロガヤツリ
植物	—	原産地	アフリカ(マダガスカル)
		選定理由	水辺の在来種との競合の懸念がある。
		生態的特徴	抽水性の多年生植物で繁殖力が旺盛で寒さに強い。また、各地の河川やため池の水質浄化に有効とされ、植栽されることもある。
		生息環境	河川、ため池、湿地
		侵入経緯	明治時代末に観賞用に移入されたものが、逸出し野生化
		県内定着状況	県内の溜め池や河川に点々と生育しているが、群生する様な事例は無い。
		影響・被害	水辺の在来種との競合の懸念がある。
		防除方法等	種子ができる前の抜き取りや掘り取り
		特記事項	—

分類	防除対象	種名等	イネ目カヤツリグサ科 メリケンガヤツリ
植物	△	原産地	熱帯アメリカ
		選定理由	湿地や河川敷きに生育する在来植物との競合や駆逐の懸念がある。
		生態的特徴	多年生草本で太くて短い根茎で繁殖する。
		生息環境	河川、ため池、湿地
		侵入経緯	1959年に三重県で確認され、1990年代に分布拡大
		県内定着状況	県内の溜め池や河川に点々と生育しているが、群生する様な事例は無い。
		影響・被害	湿地や河川敷きに生育する在来植物との競合や駆逐の懸念がある。
		防除方法等	結実前の刈り取りや、抜き取る。
		特記事項	旧要注意外来種

分類	防除対象	種名等	ナデシコ目スベリヒユ科	ケツメクサ(ヒメマツバボタン)
植物	—	原産地	熱帯アメリカ	
		選定理由	在来の海岸植物等との競合が懸念される。	
		生態的特徴	多肉質の1年生草本、乾燥した日当たりの良い道端や人家の庭先に見られ、耐寒性もある。	
		生息環境	道路端、人家周辺	
		侵入経緯	園芸種のマツバボタンと混同して移入されたとみられる。	
		県内定着状況	正確な帰化時期の記録は無いが、最も古い標本として1977年高松市女木島での記録がある。現在、県内の道路端や海岸部などに普通に生育している。	
		影響・被害	在来の海岸植物等との競合が懸念される。	
		防除方法等	結実前の抜き取りや掘り取り	
		特記事項	—	

分類	防除対象	種名等	キジカクシ目キジカクシ科	アオノリュウゼツラン
植物	—	原産地	中米	
		選定理由	在来種との競合の懸念がある。	
		生態的特徴	多肉質の常緑多年生草本で、先が尖り縁に棘を持つ厚い多肉質の葉で大きなロゼットを形成する。開花まで数十年かかるといわれる。	
		生息環境	埋立て地、空き地、荒地	
		侵入経緯	天保年間に観賞用に移入されたものが逸出し、野生化	
		県内定着状況	埋立地等で稀に野生化している。逸出したものが開花した記録は無い。	
		影響・被害	在来種との競合	
		防除方法等	地表近くで葉を切り取り、切り口に除草剤塗布処理を行う。	
		特記事項	—	

3 その他の総合対策種

分類	防除対象	種名等	齧歯目ネズミ科 クマネズミ
哺乳類	—	原産地	汎世界的分布
		選定理由	島嶼部では在来種を食し、それらの存続が懸念される。
		生態的特徴	俊敏で登坂能力に優れる。1年中繁殖でき、平均5～6頭出産。種子を中心に植物を好むが動物質も食す。
		生息環境	比較的乾燥した高所に生活。都市部・農村部の建物とその周辺。
		侵入経緯	おそらく船舶とともに移動
		県内定着状況	県内に広く分布している。
		影響・被害	ビルディングや家屋内の厨房・台所などでの被害。通信機器内のケーブル線の破断。
		防除方法等	神経質なネズミであり、かご罠捕獲は難しい。ガス管や水道管と天井部の隙間のラットサインを見つけ、粘着トラップを床全体に敷き詰める。
特記事項	—		

分類	防除対象	種名等	齧歯目ネズミ科 ハツカネズミ
哺乳類	—	原産地	汎世界的分布。
		選定理由	家屋内での被害や農業被害が懸念される。
		生態的特徴	野生では穴居して、春と秋におもに繁殖。人間の居住地域では1年中繁殖も可能。1回に平均5～6頭くらい出産。雑食。
		生息環境	家屋、ビニールハウス、田畑、河川敷、土手、荒地地。
		侵入経緯	不明
		県内定着状況	県内に広く分布している。
		影響・被害	家屋内での被害、農業被害。
		防除方法等	最初は無毒餌でえさ場慣れをさせる。殺鼠剤は夜の就寝前に置き、翌朝回収。屋内や庭の植え込み、排水溝周辺にも配置。
特記事項	—		

分類	防除対象	種名等	齧歯目ネズミ科 ドブネズミ
哺乳類	—	原産地	汎世界的分布
		選定理由	家屋内での被害や島嶼部での農作物被害があり、人畜共通の伝染病を媒介する可能性が懸念される。
		生態的特徴	下水管の破損部分やコンクリートの割れ目の隙間などで1年中繁殖でき、1回に平均8～9頭くらい出産する。動物性をよく食べる。
		生息環境	都市部など主に下水、台所流し、ゴミ捨て場
		侵入経緯	不明
		県内定着状況	県内に広く分布している。
		影響・被害	在来種との競合、人畜共通の感染症の媒介
		防除方法等	—
特記事項	—		

分類	防除対象	種名等	キジ目ナンベイウズラ科 コリンウズラ
鳥類	—	原産地	北米、中米、キューバ
		選定理由	在来種との競合の懸念がある。
		生態的特徴	群れで生活し、昆虫、果実、種子などを食べる、1回に12～16個の産卵
		生息環境	森林、ヨシ原、河川敷
		侵入経緯	1980年頃猟犬の訓練用に移入
		県内定着状況	限定分布である。
		影響・被害	在来種との競合
		防除方法等	限定分布のため、根絶は可能であるが、飼育されているものもある。
特記事項	旧要注意外来種		

分類	防除対象	種名等	キジ目キジ科 コウライキジ(大陸産亜種)
鳥類	—	原産地	朝鮮半島
		選定理由	在来種との競合だけでなく交雑による遺伝的攪乱の懸念がある。
		生態的特徴	しばし木に登り木の実をついばんだりねぐらにする。1回で6～10個産卵する。
		生息環境	低地を好む
		侵入経緯	1930年代に狩猟増殖の目的で放鳥
		県内定着状況	限定分布である。
		影響・被害	在来種との競合
		防除方法等	限定分布のため、根絶は可能であるが、飼育されているものもある。
特記事項	—		

分類	防除対象	種名等	カモ目カモ科 コブハクチョウ
鳥類	—	原産地	ヨーロッパ、中央アジア、シベリア南部
		選定理由	在来種との競合が懸念される。
		生態的特徴	全長1.6m、嘴はオレンジ色で基部に黒いコブがある。
		生息環境	ため池、河川
		侵入経緯	意図的な放鳥
		県内定着状況	県内では点在分布
		影響・被害	在来種との競合が懸念される。
		防除方法等	根絶可能であるが、地域で餌付けされるなど、駆除には、住民の理解が必要な場合が多い。
特記事項	—		

分類	防除対象	種名等	スズメ目チメドリ科 ヒゲガビチョウ
鳥類	—	原産地	インドからミャンマー、中国中部、南部
		選定理由	在来種との競合の懸念がある。
		生態的特徴	地上で昆虫類や果実を採食する。
		生息環境	丘陵地の森林やその林縁部
		侵入経緯	愛玩用に移入されたものが逸出、野生化
		県内定着状況	点状的な分布
		影響・被害	在来種との競合
		防除方法等	広域的な同時捕獲で根絶させることが可能と考える。
特記事項	特定外来生物		

分類	防除対象	種名等	スズメ目ムクドリ科 ハッカチヨウ
鳥類	—	原産地	中国中部および南東部、台湾、ラオス北部
		選定理由	在来種との競合が懸念される。
		生態的特徴	地上で昆虫やマメ科の種子などを採食し、年2回繁殖する。
		生息環境	平野部の河川敷、住宅地、農耕地など
		侵入経緯	愛玩用に移入されたものが逸出し野生化
		県内定着状況	レジャー施設から逸出したものが野生化
		影響・被害	在来種との競合
		防除方法等 特記事項	県内で広域的に分布し、根絶は困難と考える。 —
分類	防除対象	種名等	コイ目コイ科 ソウギョ
魚類	—	原産地	中国
		選定理由	捕食による水生植物への影響が懸念される。
		生態的特徴	全長1mを超える大型魚。大食漢で水草を好んで食べる。
		生息環境	植物プランクトンが繁茂する緩やかな流れの大きな川や湖沼
		侵入経緯	明治時代に食用種として中国から移入。その後各地に放流された。
		県内定着状況	ヒシ等除去のため、ため池に放流されている。県内での分布は限定的である。
		影響・被害	稀少な水生植物の減少、魚類や昆虫類の産卵場となる水草帯の減少が懸念される。
		防除方法等 特記事項	— 旧要注意外来種
分類	防除対象	種名等	ヨウセンチュウ目アフェレンクス科 マツノザイセンチュウ
その他の無脊椎動物	その他	原産地	北米
		選定理由	マツを罹病させることでマツに依存する在来生物の競合が懸念される。
		生態的特徴	アカマツ、クロマツなどに寄生しマツ枯れを引き起こす。
		生息環境	マツノマダラカミキリの成虫により伝播する。
		侵入経緯	造船用に輸入した木材に付着していたといわれている。
		県内定着状況	県内で広域的にみられるが、マツそのものが減少している。
		影響・被害	マツ類の枯死
		防除方法等 特記事項	殺虫剤の散布、抵抗性マツの植栽 —
分類	防除対象	種名等	イガイ目イガイ科 ムラサキイガイ
その他の無脊椎動物	—	原産地	地中海沿岸
		選定理由	在来種との競合だけでなく交雑による遺伝的攪乱やカキ養殖への懸念がある。
		生態的特徴	沿岸の護岸や、排水施設、牡蠣棚などに付着する。
		生息環境	海水域の潮間帯や人工物に付着する。
		侵入経緯	バラスト水への混入や船体への付着
		県内定着状況	県内には広域的に分布している。
		影響・被害	在来種との競合だけでなく交雑による遺伝的攪乱、カキ養殖への影響
		防除方法等 特記事項	沿岸部でのモニタリング 旧要注意外来
分類	防除対象	種名等	イガイ目イガイ科 ミドリイガイ
その他の無脊椎動物	—	原産地	インド洋～西太平洋
		選定理由	在来種との競合だけでなく交雑による遺伝的攪乱やカキ養殖への懸念がある。
		生態的特徴	沿岸の護岸や、排水施設、牡蠣棚などに付着する。
		生息環境	海水域の潮間帯や人工物に付着する。ムラサキイガイより深い水深まで分布
		侵入経緯	バラスト水への混入や船体への付着
		県内定着状況	県内には点在的に分布している。
		影響・被害	在来種との競合だけでなく交雑による遺伝的攪乱、カキ養殖への影響
		防除方法等 特記事項	沿岸部でのモニタリング 旧要注意外来
分類	防除対象	種名等	イワヒバ目イワヒバ科 コンテリクラマゴケ
植物	—	原産地	中国
		選定理由	在来のイワヒバ属との競合、駆逐の懸念がある。
		生態的特徴	常緑の多年生草本、在来のクラマゴケより大型で、表面に紺紫色の金属光沢あり。
		生息環境	人家周辺等
		侵入経緯	明治時代に園芸用に移入されたものが逸出、野生化している。
		県内定着状況	1989年に高瀬町で、その後、東かがわ市、高松市、まんのう町、山本町等での報告がある。
		影響・被害	在来のイワヒバ属との競合、駆逐。
		防除方法等 特記事項	胞子による繁殖を防ぐには夏前に除去する。抜き取り、刈り取り —
分類	防除対象	種名等	ナデシコ目タデ科 ヒメツルソバ
植物	—	原産地	ヒマラヤ
		選定理由	在来種との競合の懸念がある。
		生態的特徴	匍匐性の多年生草本でグラウンドカバーやロックガーデン用に移入され、花期は5月～秋、茎は匍匐性で1株で約50cm程度広がる。
		生息環境	公園、人家周辺等
		侵入経緯	明治時代に移入され、1960年代に野生化したといわれる。
		県内定着状況	1991年に高松市内で発見。県内での栽培は、これより20年ほど前からと言われる、次第に県内各地で逸出したものが点々と見られる様になり、現在では普通種である。
		影響・被害	在来種との競合
		防除方法等 特記事項	結実前に刈り取るか抜き取る。 —

分類	防除対象	種名等	ナデシコ目タデ科	ヒメスイバ
植物	—	原産地	ヨーロッパ	
		選定理由	在来種との競合だけでなく、シュウ酸を含むので野生動物や家畜が多量に摂取すると中毒が懸念される。	
		生態的特徴	多年生草本で、スイバを小さくしたようなもので、雌雄異株。冬季はロゼット状、もしくは地下部で休眠	
		生息環境	田畑、道路端等	
		侵入経緯	明治初期に移入されたという。	
		県内定着状況	1956年に土庄町で採集された記録があるほか、1965年観音寺市、1966年豊中町、1967年観音寺市での採集記録があり、1960年代には既に県内各地に生育しており、現在は、普通種である。	
		影響・被害	在来種との競合だけでなく、シュウ酸を含むので野生動物や家畜が多量に摂取すると中毒を起こす。	
防除方法等	刈り取ってもすぐに再生するので、根も除去する。			
特記事項	—			

分類	防除対象	種名等	ナデシコ目タデ科	ナガバギンギン(チジμισイバ)
植物	—	原産地	ヨーロッパ	
		選定理由	在来種のギンギン等との競合だけでなく、交雑による遺伝子的攪乱、シュウ酸による家畜の中毒の懸念がある。	
		生態的特徴	多年生草本で在来種のギンギンによく似ている。日当たりの良い湿地、酸性土壌を好む。	
		生息環境	道路端、荒地、河川敷、草地等	
		侵入経緯	明治中頃に移入されたが、詳細不明	
		県内定着状況	県内では、1965年に観音寺市での記録がある。その後、1968年、1969年に坂出市での採集記録があり、1960年代には既に県内各地に生育していた様子であり、現在は普通種である。	
		影響・被害	在来種との競合だけでなく交雑による遺伝子的攪乱、家畜の中毒の恐れ	
防除方法等	深さ20cmまでの根を除去する。			
特記事項	—			

分類	防除対象	種名等	ナデシコ目タデ科	エゾノギンギン(ヒロバギンギン)
植物	—	原産地	ヨーロッパ	
		選定理由	在来種のギンギン等との競合だけでなく、交雑による遺伝子的攪乱、シュウ酸による家畜の中毒の懸念がある。	
		生態的特徴	多年生で在来種のギンギンによく似ている。日当たりの良い湿地、酸性土壌を好む。	
		生息環境	道路端、荒地、河川敷、草地等	
		侵入経緯	明治中頃に移入されたが、詳細不明	
		県内定着状況	1945年以前に既に侵入していたと言われる。最も古いものとして1964年に長尾町大窪寺で採集した記録がある。その他1966年観音寺市、大野原町、1967年に観音寺市で、1968年には高松市、塩江町での採集記録があり、現在は県内各地で見られる。	
		影響・被害	在来種との競合だけでなく交雑による遺伝子的攪乱、家畜の中毒の恐れ	
防除方法等	抜き取り、刈取り			
特記事項	旧要注意外来			

分類	防除対象	種名等	ナデシコ目ナデシコ科	ムシトリナデシコ
植物	—	原産地	ヨーロッパ	
		選定理由	河原に生息する在来植物と競合する懸念がある。	
		生態的特徴	1年～越年生草本で上部の2～3節に粘着部分があり、ここに虫が着くことがあるが、食虫植物ではない。	
		生息環境	河川敷、荒地等	
		侵入経緯	観賞用に移入したものが逸出、野生化した。	
		県内定着状況	1950年に高松市で採集した記録がある。その後、1965年に観音寺市で、1980年に丸亀市での採集記録がある。県内の川原、裸地、墓地等に広く分布している。	
		影響・被害	在来種との競合、駆逐	
防除方法等	結実前に抜き取るか、掘り取る。			
特記事項	—			

分類	防除対象	種名等	ナデシコ目ナデシコ科	マンテマ
植物	—	原産地	ヨーロッパ	
		選定理由	海岸砂地、河原などの砂地に侵入し、在来植物との競合または環境を改変する懸念がある。	
		生態的特徴	一年～越年生草本で、しばしば群生する。	
		生息環境	海岸砂浜、海岸林、海岸埋立て地、河川敷、道路縁等	
		侵入経緯	園芸植物として移入したものが逸出、野生化した。	
		県内定着状況	最も古いもので、1953年観音寺市有明浜で採集した記録があるが、恐らくこれ以前に帰化していたものと思われる。その後、1965年詫間町、1967年豊浜町、観音寺市、1972年～1974年に坂出市の採集記録がある。現在、県内各地の海岸、川原、道路端等の裸地に群生している。	
		影響・被害	海岸砂地、河原などの砂地に侵入し、在来植物との競合または環境を改変する	
防除方法等	結実前に抜き取るか、掘り取る。			
特記事項	—			

分類	防除対象	種名等	キンボウゲ目ケシ科	アツミゲシ
植物	○	原産地	北アフリカ、地中海沿岸	
		選定理由	モルヒネを含有し、あへん法で栽培禁止(有毒植物)となっている。	
		生態的特徴	越年生草本でしばしば群生する。栽培禁止と知らずに栽培されていることもある。	
		生息環境	空地、廃屋、道路端等	
		侵入経緯	1964年に愛知県で発見される。	
		県内定着状況	1977年に池田町で最初に発見されて以降、県内に散発的に生育が確認されるが、定着性はあまりない。麻薬取り締まりの対象として栽培が禁止されている。	
		影響・被害	モルヒネを含有し、あへん法で栽培禁止となっている。	
防除方法等	発見次第、最寄りの警察署、保健所に通報の上、処分してもらう。			
特記事項	あへん法で栽培禁止			

分類	防除対象	種名等	アブラナ目アブラナ科	ハルザキヤマガラシ
植物	—	原産地	ヨーロッパ	
		選定理由	在来植物や畑作物との競合やアレロパシー作用が懸念される。	
		生態的特徴	越年から短命な多年草冷涼で、日当たりがよく湿った肥沃な土地を好む。	
		生息環境	水田、畑、道路端等	
		侵入経緯	飼料用として麦に混入して移入されたといわれる。	
		県内定着状況	1967年に観音寺市で初記録、その後、1973年に豊中町の記録がある。県内では、家畜の飼料に混入して帰化したと思われ、牛舎や鶏舎周辺で見つかった。最近では報告事例は無く、一時的な帰化であったと思われる。	
		影響・被害	在来植物や畑作物との競合やアレロパシー作用。	
		防除方法等 特記事項	結実前に抜き取るか掘り取る。 旧要注意外来	

分類	防除対象	種名等	フウチョウソウ目アブラナ科	セイヨウカラシナ
植物	—	原産地	西アジア	
		選定理由	河川敷や草原に生育する在来植物との競合が懸念される。	
		生態的特徴	一年生草本で日当たりの良い温暖地を好む	
		生息環境	河川敷、草地、道端、荒地等	
		侵入経緯	平安時代までに移入されていたとされるが、戦後広がったのは、ヨーロッパや北米からの侵入したものとされる。	
		県内定着状況	最も古い標本として1975年豊浜町で採集した記録があり、その後、1975年～1977年坂出市での採集記録がある。県内の河川、裸地、道端等に広く群生している。最近ではカラシナと同一種とする意見がある。	
		影響・被害	河川敷や草原に生育する在来植物との競合	
		防除方法等 特記事項	結実前に抜き取るか、刈り取る。 —	

分類	防除対象	種名等	マメ目マメ科	エニシダ
植物	—	原産地	ヨーロッパ	
		選定理由	密集した藪になり、河川敷や河岸の在来植物と競合し、駆逐が懸念される。	
		生態的特徴	常緑低木、窒素固定作用により土壌の富栄養化を進め植生を変化させる。	
		生息環境	荒地、崩壊地、道路路面等	
		侵入経緯	観賞用に移入されたが、緑化植物として利用されたものが、野生化した。	
		県内定着状況	1974年に塩江町での記録があり、その後、法面緑化工事に使用され一時増加したが、増殖拡大する事が無く、最近ではほとんど見なくなった。	
		影響・被害	河川敷や河岸の在来植物と競合し、駆逐する。	
		防除方法等 特記事項	地表近くで伐採し、萌芽を防ぐ。実生は手作業で抜き取り焼却する。 —	

分類	防除対象	種名等	マメ目マメ科	アレチヌスビトハギ
植物	—	原産地	北米	
		選定理由	河原や草地に生育する在来植物と競合し、駆逐が懸念される。	
		生態的特徴	一年～多年生草本で種子に鉤毛があり付着しやすく、分散能力が高い、また、太い地下茎があり刈取られても早期に回復する。	
		生息環境	休耕田、河川敷、草地、道端、荒地等	
		侵入経緯	詳細な移入経緯は不明、1940年代に大阪で確認される。	
		県内定着状況	1968年に高瀬町で確認される。その後、1970年に観音寺市、1974年大野原町、1975年丸亀市原、1977年高瀬町、坂出市、1979年三野町の採集記録があり、この当時に帰化が始まったものと思われる。現在、県内に広く生育している。類似種のイリノヌスビトハギはまだ記録されていない。	
		影響・被害	河原や草地に生育する在来植物と競合し、駆逐する。	
		防除方法等 特記事項	結実前に抜き取る。 —	

分類	防除対象	種名等	カタバミ目カタバミ科	オオキバナカタバミ
植物	—	原産地	南アフリカ	
		選定理由	在来植物と競合し、駆逐だけでなく、シュウ酸を含むことから家畜の中毒が懸念される。	
		生態的特徴	多年生草本で茎はなく、葉は全て根生で、鱗茎を作って増殖する。	
		生息環境	海岸砂浜、道端、河川敷、畑地、人家周辺等	
		侵入経緯	園芸品種として明治中期に移入。	
		県内定着状況	1950年頃豊浜町で確認されたのが最初で、この当時は大野原町までしか見られないとしている。現在、県内に点々と見られ、人為的な塊茎の持ち運びなどで増加傾向にある。	
		影響・被害	在来植物と競合し、駆逐するだけでなく、シュウ酸を含むことから家畜の中毒の発生。	
		防除方法等 特記事項	鱗茎を残さないよう抜き取る。 —	

分類	防除対象	種名等	セリ目ウコギ科	カミヤツデ
植物	—	原産地	中国、台湾	
		選定理由	河川敷や林縁に生育する在来植物と競合し、駆逐が懸念される。	
		生態的特徴	常緑の低木、日本では冬季に地上部が枯れる。実生でも増殖し、生長は早い。幹の髄をコルクや紙などに使用	
		生息環境	河川敷や海岸沿い、公園、庭園等	
		侵入経緯	1935年以前に観賞用として持ち込まれたともいわれている。	
		県内定着状況	栽培されていたものが稀に逸出しており、普通寺市や観音寺市で記録があるが、最近は見なくなった。	
		影響・被害	河川敷や林縁に生育する在来植物との競合し、駆逐する。	
		防除方法等 特記事項	結実前に伐採し、切株の切り口に除草剤塗布処理をする。 —	

分類	防除対象	種名等	リンドウ目アカネ科	オオフトバムグラ
植物	—	原産地	北米	
		選定理由	海岸砂浜、河川敷に生育する在来植物と競合し、駆逐が懸念される。	
		生態的特徴	1年生の草本で日当たりの良い海岸砂浜や荒地に生育する。	
		生息環境	砂地があった道路端、海岸砂浜、河川敷等	
		侵入経緯	1920年代に東京に移入される。	
		県内定着状況	県内では、1958年に塩江町竜王山から始まり、1959年の塩江町相栗峠で、1964年観音寺市、1972年飯山町土器川川原、1973年豊浜町の採集記録があり、県内に広く点在しているが、有明浜や土器川中下流部には個体数が多い。	
		影響・被害	海岸砂浜、河川敷に生育する在来植物と競合し、駆逐する。	
		防除方法等 特記事項	結実前に抜き取るか、掘り取る。 旧要注意外来	

分類	防除対象	種名等	ナス目ヒルガオ科	アメリカネナシカズラ
植物	—	原産地	北米	
		選定理由	海岸等に生育する在来植物に寄生し、寄生された植物の生育を抑制し、駆逐する懸念がある。	
		生態的特徴	1年生のつる植物で葉緑素を持たない寄生植物で他の植物に寄生する。	
		生息環境	海岸砂浜、河川敷、荒地、畑地等	
		侵入経緯	終戦後から侵入し、輸入穀物や緑化用種子に混入して1970年頃に東京都を中心に確認されるようになった。	
		県内定着状況	1964年に観音寺市で採集した記録があるが、これ以前に帰化していたものと思われる。その後、1967年にも観音寺市、1978年高松市の採集記録があり、県内に広く点々と分布している。	
		影響・被害	在来の植物に寄生し、寄生された植物の生育を抑制し、駆逐する。	
		防除方法等 特記事項	結実前の抜き取り、種子がある場合は乾燥後、焼却する。 —	

分類	防除対象	種名等	ナス目ヒルガオ科	ホシアサガオ
植物	—	原産地	熱帯アメリカ	
		選定理由	在来植物との競合、駆逐だけでなく、ダイズ畑の雑草として懸念される。	
		生態的特徴	1年生のつる植物で畑地に侵入し作物に絡みつくため防除が困難になる。	
		生息環境	道路端、畑地、果樹園、耕作放棄地等	
		侵入経緯	終戦後に輸入穀物に混じって移入されたといわれている。	
		県内定着状況	1967年に善通寺市で記録され、その後、1978年琴平町で採集された記録がある。以後、県内各地に広く見られる様になり、河川縁や道端、休耕地等では群生している場所もある。	
		影響・被害	在来植物との競合、駆逐だけでなく、ダイズ畑の雑草となる。	
		防除方法等 特記事項	発見次第に抜き取ったり、掘り取ったりする。 —	

分類	防除対象	種名等	シソ目クマツヅラ科	アレチハナガサ類 アレチハナガサ
植物	—	原産地	南米	
		選定理由	河川敷の湿地や草原に生育する在来植物と競合し、駆逐する懸念がある。	
		生態的特徴	多年生草本で高さ1～2mになり、根茎で繁殖し、日当たりの良い裸地を好む。	
		生息環境	河川敷、道路端等	
		侵入経緯	1957年に神奈川県で確認、詳細不明	
		県内定着状況	1976年に三野町で最初に記録されており、現在県内に広く見られる。	
		影響・被害	河川敷の湿地や草原に生育する在来植物と競合し、駆逐する。	
		防除方法等 特記事項	抜き取るか刈り取る。 —	

分類	防除対象	種名等	シソ目クマツヅラ科	アレチハナガサ類 ヤナギハナガサ
植物	—	原産地	南米	
		選定理由	河川敷の湿地や草原に生育する在来植物と競合し、駆逐する懸念がある。	
		生態的特徴	多年草で1～2mになる。日当たりの良い裸地を好む。	
		生息環境	造成地、河川敷、湿地等	
		侵入経緯	1940年代後半から東海地方で確認され、園芸品種、緑化資材から逸出したといわれる。	
		県内定着状況	1965年5月に観音寺市の記録がある他、1974年満濃町炭所西江畑、1978年財田町灰倉の記録があり、現在県内に広く見られる。	
		影響・被害	河川敷の湿地や草原に生育する在来植物と競合し、駆逐する。	
		防除方法等 特記事項	抜き取るか刈り取る。 —	

分類	防除対象	種名等	シソ目クマツヅラ科	アレチハナガサ類 ダキバアレチハナガサ
植物	—	原産地	南米	
		選定理由	河川敷の湿地や草原に生育する在来植物と競合し、駆逐する懸念がある。	
		生態的特徴	多年草でかつて、アレチハナガサ、ヤナギハナガサと混同されていた。	
		生息環境	造成地、河川敷、湿地等	
		侵入経緯	—	
		県内定着状況	最近区別され始めた。詳細な帰化時期は不明であるが、最近では本種の方が多く見られる。	
		影響・被害	河川敷の湿地や草原に生育する在来植物と競合し、駆逐する。	
		防除方法等 特記事項	抜き取るか刈り取る。 —	

分類	防除対象	種名等	ナス目ナス科 チョウセンアサガオ属 ヨウシュチョウセンアサガオ
植物	—	原産地	北米
		選定理由	在来種との競合だけでなく、アルカロイド類を含む有毒植物であり、誤摂取の懸念があるため。
		生態的特徴	一年～多年生草本で植物体全体に有毒物質のアルカロイド類を含む。
		生息環境	畑地、草地、道路端
		侵入経緯	江戸時代に薬用、観賞植物として持ち込まれたものが逸出、野生化した
		県内定着状況	正確な野生化時期の記録は無いが、最も古い標本として1967年8月の観音寺市での採集した記録があるほか、1973年坂出市築港町の採集記録がある。
		影響・被害	在来種との競合だけでなく、有毒植物のため誤摂取。
		防除方法等 特記事項	抜き取り、刈取り 旧要注意外来

分類	防除対象	種名等	ナス目ナス科 チョウセンアサガオ属 ツノミチョウセンアサガオ
植物	—	原産地	中米
		選定理由	在来種との競合だけでなく、アルカロイド類を含む有毒植物であり、誤摂取の懸念があるため。
		生態的特徴	一年～多年生草本で植物体全体に有毒物質のアルカロイド類を含む。
		生息環境	畑地、草地、道路端
		侵入経緯	—
		県内定着状況	最初の記録は、1988年10月、坂出市入船町で確認。一時的な帰化であったのか以後の記録は無い。
		影響・被害	在来種との競合だけでなく、有毒植物のため誤摂取。
		防除方法等 特記事項	抜き取り、刈取り 旧要注意外来

分類	防除対象	種名等	ナス目ナス科 チョウセンアサガオ属 シロバナチョウセンアサガオ
植物	—	原産地	中～南米
		選定理由	在来種との競合だけでなく、アルカロイド類を含む有毒植物であり、誤摂取の懸念があるため。
		生態的特徴	一年～多年生草本で植物体全体に有毒物質のアルカロイド類を含む。
		生息環境	畑地、草地、道路端
		侵入経緯	—
		県内定着状況	正確な野生化時期の記録は無いが、最も古い標本として1977年7月に坂出市入船町で採集した記録があるほか、1978年丸亀市広島島の採集記録がある。
		影響・被害	在来種との競合だけでなく、有毒植物のため誤摂取。
		防除方法等 特記事項	抜き取り、刈取り 旧要注意外来

分類	防除対象	種名等	ナス目ナス科 チョウセンアサガオ属 ケチョウセンアサガオ
植物	—	原産地	北米
		選定理由	在来種との競合だけでなく、アルカロイド類を含む有毒植物であり、誤摂取の懸念があるため。
		生態的特徴	一年～多年生草本で植物体全体に有毒物質のアルカロイド類を含む。
		生息環境	畑地、草地、道路端
		侵入経緯	—
		県内定着状況	最も古い標本として1972年10月の丸亀市本島で採集した記録のほか、1973年坂出市築港町の採集記録がある。
		影響・被害	在来種との競合だけでなく、有毒植物のため誤摂取。
		防除方法等 特記事項	抜き取り、刈取り 旧要注意外来

分類	防除対象	種名等	シソ目ゴマノハグサ科 ウキアゼナ
植物	—	原産地	北米
		選定理由	池沼や湿地の在来植物と競合し、駆逐の懸念がある。
		生態的特徴	浮葉から湿生の一年生草本。水田雑草で、節を含む断片から再生し、繁殖力が強い。
		生息環境	池沼、水田、水路、ため池
		侵入経緯	1954年に岡山県で確認後、全国に広がっている。
		県内定着状況	1982年に高松市で記録され、その後三木町、高松市内各地で確認されたがいずれも限定的分布であり、休耕田に見られたもので、排水され乾田化されると枯死し、継続性はない。
		影響・被害	池沼や湿地の在来植物と競合し、駆逐する。
		防除方法等 特記事項	排水し乾田化すると枯死できる。 —

分類	防除対象	種名等	キク目キク科 ワタゲハナグルマ
植物	—	原産地	南アフリカ
		選定理由	海岸砂丘や河川敷に生育する在来植物と競合し、駆逐する。
		生態的特徴	タンポポに似るが、つる性のものがワタゲツルハナグルマという。
		生息環境	道路法面、道端、休耕地
		侵入経緯	園芸種として持ち込まれたものが逸出、野生化
		県内定着状況	1987年に坂出市での記録があり、他にも同じく坂出市内での報告がある。その後確認記録が無かったが、栽培品の逸出したものが近年時々報告され始めている。
		影響・被害	海岸砂丘や河川敷に生育する在来植物と競合し、駆逐する。
		防除方法等 特記事項	走out枝や地下部を残さないよう抜き取る。 —

分類	防除対象	種名等	キク目キク科	ユウゼンギク
植物	—	原産地	北米	
		選定理由	草地に生育する在来植物と競合し、駆逐する懸念がある。	
		生態的特徴	多年草で日当たりと水はけの良い場所を好み、紫の花が6～11月に道端や空き地に咲く。	
		生息環境	荒地、休耕地	
		侵入経緯	大正時代に観賞用として移入され、各地に帰化している。	
		県内定着状況	1983年に丸亀市で記録される。観賞用に栽培されていたものが放棄や投棄され、稀に野生化している。	
		影響・被害	草地に生育する在来植物と競合し、駆逐する。	
		防除方法等 特記事項	結実前に抜き取り、刈り取り —	

分類	防除対象	種名等	キク目キク科	アメリカセンダングサ
植物	—	原産地	北米	
		選定理由	水辺や湿地に生育する在来植物と競合し、駆逐する懸念がある。	
		生態的特徴	1mを超える1年生の草本で、水辺や湿地を好み、種子が動物に付着しやすい。	
		生息環境	休耕地、河川敷、荒地、道端	
		侵入経緯	1920年代に琵琶湖で確認される。非意図的な移入とされる。	
		県内定着状況	1960年代には珍しいものではなかったが最も古い標本として1964年に観音寺市で採集した記録がある。現在、県内に広く分布しており、普通種である。	
		影響・被害	水辺や湿地に生育する在来植物と競合し、駆逐する。	
		防除方法等 特記事項	結実前に抜き取るか、掘り取る。 旧要注意外来	

分類	防除対象	種名等	キク目キク科	栽培キク属
植物	—	原産地	主に東アジアに多いが、ヨーロッパと北アメリカにもある。	
		選定理由	在来種との競合だけでなく、交雑して遺伝子攪乱の懸念がある。	
		生態的特徴	多年生草本で、花期の異なる品種があり、遮光栽培や電照栽培により、花期が周年化している。	
		生息環境	日当たりのよい山地や海岸の岩場、斜面地	
		侵入経緯	日本で作り出された古い園芸種といわれ、栽培種が逸出、投棄などにより野生化している。	
		県内定着状況	古い標本として1971年の高松市で採集した記録がある。	
		影響・被害	在来種との競合だけでなく、交雑して遺伝子攪乱を起こす。	
		防除方法等 特記事項	絶滅危惧種の周辺では利用を控えるか、花粉をつけない品種を利用する。 —	

分類	防除対象	種名等	キク目キク科	ケナシヒメムカシヨモギ
植物	—	原産地	北米	
		選定理由	海浜などに生育する在来植物と競合し、駆逐の懸念がある。	
		生態的特徴	1～越年生草本。海浜の砂浜などに生育し、近縁種のヒメムカシヨモギより温度の高い乾いた環境に見られると言われるが、空き地や休耕地に普通に見られる。	
		生息環境	海浜の砂浜や道路端や荒地	
		侵入経緯	明治初期に鉄道沿線に沿って広がったとされる(明治草とか鉄道草とも呼ばれた)。	
		県内定着状況	正確な帰化時期の記録はないが、1960年代には特に珍しいものではなく、1965年に観音寺市で採集した記録、1970年に高松市での採集記録があり。現在、県内に広く分布しており普通種である。	
		影響・被害	海浜などに生育する在来植物との競合し、駆逐する。	
		防除方法等 特記事項	結実前に抜き取るか、掘り取る。 —	

分類	防除対象	種名等	キク目キク科	ハルシャギク
植物	—	原産地	北米	
		選定理由	河原などに生育する在来植物種と競合し、駆逐する懸念がある。	
		生態的特徴	1年生草本であり、特定外来生物のオオキンケイギクに似るが、花の中心が濃紅色で周辺が黄色い蛇の目模様。	
		生息環境	河原、空地、道端、人家周辺	
		侵入経緯	明治初頭に観賞用として移入したものが逸出、野生化	
		県内定着状況	正確な野生化時期の記録はないが、一時期、修景緑化として意図的に播種されたことから、県内に一気に拡大した。川原や墓地等に群生することがある。1964年に観音寺市で採集した記録がある。	
		影響・被害	河原などに生育する在来植物種と競合し、駆逐する。	
		防除方法等 特記事項	結実前に抜き取るか、掘り取る —	

分類	防除対象	種名等	キク目キク科	ヒメジョオン
植物	—	原産地	北米	
		選定理由	山地の草原に生育する在来植物種と競合し、駆逐する懸念がある。	
		生態的特徴	1～2年生の草本で土壌を選ばず、土壌への適応性が高い。	
		生息環境	河原、畑地、樹園地、道路端	
		侵入経緯	江戸末期に移入されたものが、逸出。	
		県内定着状況	古くから県内に帰化したもので、正確な帰化時期の記録は無いが、最も古い標本として1964年に観音寺市の記録がある。他に1967年坂出市、1977年綾歌町での採集記録がある。現在は、県内到处で見られる。	
		影響・被害	山地の草原に生育する在来植物種と競合し、駆逐する。	
		防除方法等 特記事項	結実前に抜き取るか、掘り取る 旧要注意外来	

分類	防除対象	種名等	キク目キク科	ペラペラヨメナ
植物	—	原産地	北中米	
		選定理由	海岸や川岸の岩場に生育する在来植物種との競合し、駆逐する懸念がある。	
		生態的特徴	多年生草本で石垣の隙間や川岸の岩場に侵入する。	
		生息環境	川沿いの崖、人家周辺の石垣など。	
		侵入経緯	明治末期に観賞用、緑化用として導入されたものが逸出。	
		県内定着状況	最初の記録は、1971年高松市紫雲山、ほか高松市、丸亀市、大野原町等で確認されたが、散発的に確認される。	
		影響・被害	海岸や川岸の岩場に生育する在来植物種と競合し、駆逐する。	
		防除方法等 特記事項	小さな株は抜き取るか、大きな株は除草剤処理 —	

分類	防除対象	種名等	キク目キク科	フランスギク
植物	—	原産地	ヨーロッパ	
		選定理由	在来植物と競合し、駆逐する懸念がある。	
		生態的特徴	耐寒性または半耐寒性のある一年または多年生草本	
		生息環境	畑地、牧草地、道端、空地	
		侵入経緯	江戸時代末期に園芸品種として導入されたものが逸出。	
		県内定着状況	修景緑化として播種されたことから、県内に一気に拡大した。1968年に坂出市、詫間町で逸出が確認されている。	
		影響・被害	在来植物と競合し、駆逐する。	
		防除方法等 特記事項	結実前に抜き取り、根茎を残さないようにする。摘み取った花から落ちる種子にも注意する。 —	

分類	防除対象	種名等	キク目キク科	アラゲハンゴウソウ
植物	—	原産地	北米	
		選定理由	湿原や自然草地に生育する在来植物と競合し、駆逐する懸念がある。	
		生態的特徴	越年生草本で、地下茎で繁殖する。	
		生息環境	荒地、道路端、河川敷等	
		侵入経緯	戦前に北海道に園芸用に持ち込まれたものが投棄・逸出したものと思われる。	
		県内定着状況	正式記録の始まりは1975年多度津町であり、県内では大規模に群生することが無く、単年で消失する事が多い。	
		影響・被害	在来種との競合	
		防除方法等 特記事項	結実前に抜き取るか、掘り取る —	

分類	防除対象	種名等	キク目キク科	オオオナモミ
植物	—	原産地	ユーラシアもしくは北米といわれる。	
		選定理由	在来種(オナモミ)との競合が懸念されるほか、牧草地や農作物の有害雑草となる懸念がある。	
		生態的特徴	一年草で、果実(イガ)が動物に付着して散布されるほか、水に運ばれて分布を広げることから、河原などに多い。	
		生息環境	畑地、牧草地、河川敷、道路端	
		侵入経緯	戦前(1929年)に岡山県で確認され、現在は、全国で見られる	
		県内定着状況	正確な帰化時期の記録は無いが、最も古い標本として1965年に豊浜町で採集した記録がある。他に、1972年飯山町、1977年仁尾町での採集記録があり、現在、県内に広く分布している。	
		影響・被害	河原やダム湖などの水際で、在来のオナモミの生育環境に侵入した場所では置き換わり現象が起きている。	
		防除方法等 特記事項	抜き取り、刈り取り(開花前の地際近く)、除草剤処理 旧要注意外来種	

分類	防除対象	種名等	ユリ目ユリ科	シンテツボウユリ(タカザゴユリ)
植物	—	原産地	台湾	
		選定理由	絶滅危惧種を含む在来のユリ属の遺伝的攪乱を引き起こす懸念がある。	
		生態的特徴	多年草で高さ1.5m程度の直立茎を出し、白いラッパ状の花を着ける。種子を大量に風分布させる。	
		生息環境	荒地、道端、高速道路法面	
		侵入経緯	戦前に(1923年頃)観賞用として導入され、高速道路法面などでも見られる。	
		県内定着状況	正確な帰化時期の記録は無いが、1980年に仲南町で採集した記録がある。この前後に目立ち始めるが、現在、県内に点々と生育している。	
		影響・被害	絶滅危惧種を含む在来のユリ属の遺伝的攪乱を引き起こす。	
		防除方法等 特記事項	開花、結実前に抜き取り、刈り取り —	

分類	防除対象	種名等	キジカクシ目ヒガンバナ科	ハナニラ(セイヨウアマナ)
植物	—	原産地	中南米	
		選定理由	草地で在来の春植物と競合し、駆逐することが懸念される。	
		生態的特徴	多年生草本で全体にニラのような臭いがあり、旺盛に繁殖する。	
		生息環境	人家周辺、空き地に生育し、地上部は春のみに見られる。鱗茎と種子で繁殖し日当たりの良いところを好み耐寒性も高い。	
		侵入経緯	明治時代に観賞用として移入され逸出したり、放棄されたもの。	
		県内定着状況	正確な野生化時期の記録は無いが、1966年に十王堂で採集した記録があり、現在、県内で散見される。	
		影響・被害	草地で在来の春植物と競合し、駆逐する。	
		防除方法等 特記事項	鱗茎ごと抜き取るか、掘り取る。開花期に除草剤処理。 —	

分類	防除対象	種名等	キジカクシ目アヤメ科 ヒメヒオウギズイセン
植物	—	原産地	原種はアフリカ原産、フランスでつくられた園芸品種
		選定理由	河川敷、海岸や産地に草原、二次林林床に生育する在来植物と競合し、駆除する懸念がある。
		生態的特徴	多年草で球根があり、耐寒性が強く、排水良好で日当たりの良い場所を好み、地面を這う花茎を出して増殖する。
		生息環境	海岸の草地、河川敷、二次林、荒地、道路端、人家周辺
		侵入経緯	明治中期に園芸品種として移入され、逸出した。
		県内定着状況	正確な野生化時期の記録は無いが、1960年代には見られ、現在、県内に散見される。
		影響・被害	河川敷、海岸や産地に草原、二次林林床に生育する在来植物と競合し、駆除する。
防除方法等	結実前に抜き取る。		
特記事項	—		

分類	防除対象	種名等	イネ目イネ科 メリケンカルカヤ
植物	—	原産地	北米
		選定理由	雑木林、草地、河川敷に生育する在来植物と競合し、駆逐する懸念がある。
		生態的特徴	多年生草本でしばしば群生する。根茎で繁殖し、酸性土壌や貧栄養土壌でも生育でき、耐寒性も強い。
		生息環境	草地、畑地、雑木林、畦、道路端、荒地など
		侵入経緯	1940年代に移入され逸出した。
		県内定着状況	最初の記録は、1962年11月に坂出市昭和町、1973年坂出市常山、1977年高松市女木島、1980年綾歌町栗熊東。現在、県内に広く分布しており群生している場所もある。
		影響・被害	雑木林、草地、河川敷に生育する在来植物と競合し、駆逐する。
防除方法等	株が小さいうちは、開花次第、抜き取る。		
特記事項	旧要注意外来		

分類	防除対象	種名等	イネ目イネ科 ハルガヤ
植物	—	原産地	ヨーロッパ～シベリア
		選定理由	里山の二次草原などの在来植物と競合し、駆逐する懸念がある。
		生態的特徴	多年生草本で直立し叢生する。耐寒、大旱性も強い。春先にはクマリンの芳香がする。
		生息環境	草地、畑地、畦、道路端、荒地など
		侵入経緯	1868年に牧草として移入され、逸出した。
		県内定着状況	最初の記録は、1966年5月観音寺市栗井町、他に、1969年5月普通寺市生野町の記録がある。法面緑化工として播種された事例もあった。一時期県内に広く拡散していたが、現在、あまり見かけなくなっている。
		影響・被害	里山の二次草原などの在来植物と競合し、駆逐する。
防除方法等	種子が散布される前に刈り取りや抜き取りを早めに行う。		
特記事項	—		

分類	防除対象	種名等	イネ目イネ科 シロガネヨシ(パンパグラス)
植物	—	原産地	南米
		選定理由	大型の株になり、在来植物と競合し、駆逐する懸念がある。
		生態的特徴	大型の多年生草本で根茎から茎を出して株を拡げる。日当たりの良い場所を好むが、耐寒性は弱い。
		生息環境	海岸砂浜、攪乱地、荒地、河川敷
		侵入経緯	明治時代中期に観賞用に移入され、逸出した。
		県内定着状況	荘内半島では防風垣として畑の縁に植えられていた。放棄されたものが稀に見られるが、逸出野生化しているとは言いえない状態である。
		影響・被害	大型の株になり、在来植物と競合し、駆逐する。
防除方法等	株ごと掘り取る。(ミニホウやトラクターで引き抜く)		
特記事項	—		

分類	防除対象	種名等	イネ目イネ科 オオクサキビ
植物	—	原産地	北米
		選定理由	湿地や河川敷に生育する在来植物と競合し、駆逐する懸念がある。
		生態的特徴	一年生草本で種子の生産量は多く、土壌中で10年以上休眠し、家畜に食べられても生存している。
		生息環境	湿地、道路端、荒地、河川敷
		侵入経緯	1927年に牧草として移入され、逸出した。
		県内定着状況	最初の記録は1966年11月に観音寺市で、1967年大野原町、1968年坂出市、1973年丸亀市、1978年観音寺市の記録がある。最初はゆっくりと広がっていたが、1980年代には県内に入る所で見られる様になり、現在は普通種である。
		影響・被害	湿地や河川敷に生育する在来植物と競合し、駆逐する。
防除方法等	結実前に刈り取るが、他の植物で日陰になると消失する。		
特記事項	—		

分類	防除対象	種名等	イネ目イネ科 キシウスズメノヒエ
植物	△	原産地	北米
		選定理由	在来の抽水植物であるアシカキ、サヤヌカクサ等と競合しており、水辺の生態にも悪影響を及ぼしている。
		生態的特徴	抽水から湿生の多年生草本で茎が地表、水中を這って広がる。
		生息環境	河川、湿地、水田、ため池
		侵入経緯	1924年に和歌山県で確認され、戦後各地に拡大した。
		県内定着状況	最初の記録は、1965年の普通寺市であり、既に多数あったという、当時の標本としては、1966年三野町、1967年豊中町、1975年豊浜町、1978年丸亀市広島、1982年丸亀市(本土部)の採集記録がある。県内のため池、河川、休耕田や湿った裸地等に生育し、現在ではチクボスズメノヒエ同様普通種である。在来の抽水植物であるアシカキ、サヤヌカクサ等と競合しており、水辺の生態にも悪影響を及ぼしている。
		影響・被害	在来の抽水植物であるアシカキ、サヤヌカクサ等と競合している。
防除方法等	土中に埋没させ、湛水状態にする。		
特記事項	—		

分類	防除対象	種名等	イネ目イネ科	セイバンモロコシ
植物	—	原産地	アフリカ地中海側	
		選定理由	河川敷や草原に生育する在来植物と競合し、駆逐する懸念がある。	
		生態的特徴	大型の多年生でススキのような株立ちをし、地下茎で旺盛に繁殖する。	
		生息環境	道端、河川敷、果樹園など	
		侵入経緯	飼料作物として1938年に千葉県に移入され、戦後急激に広がる。	
		県内定着状況	正確な帰化時期の記録は無いが、1950年代には見られたと言う。最も古い標本として1965年7月観音寺市で採集した記録がある。他に、1967年観音寺市、1978年善通寺市、坂出市の採集記録がある。最初は家畜飼料に混入して来たものの様であるが、その後河川縁や道端、空地等に広がり、現在は、県内に広く見られる。ここではヒメモロコシと区別していない。	
		影響・被害	河川敷や草原に生育する在来植物と競合し、駆逐する。	
		防除方法等 特記事項	結実前に複数回の刈り取り、湛水 —	

分類	防除対象	種名等	イネ目カヤツリグサ科	アメリカヤガミズゲ
植物	—	原産地	北米	
		選定理由	湿地や湿った草原に生育する在来植物と競合し、駆逐する懸念がある。	
		生態的特徴	多年生草本で、湿地や湿った草地进行を好む。	
		生息環境	湿地や湿った草地	
		侵入経緯	1986年6月に丸亀市で確認されたのが日本初記録で、種子吹付用種子に混入されていた。	
		県内定着状況	1986年6月の丸亀市が日本初記録であり、最近まで報告事例が無かったが、2017年に綾川町の山中の残土処分場で確認された。	
		影響・被害	湿地や湿った草原に生育する在来植物と競合し、駆逐する。	
		防除方法等 特記事項	結実前に抜き取るか掘り取る。 —	

分類	防除対象	種名等	タデ目タデ科	ツルドクダミ
植物	—	原産地	台湾	
		選定理由	ツル性で在来植物の生育を阻害する懸念がある。	
		生態的特徴	ツル性の多年生木本で地下茎が塊状で大きなものは1kg以上となり、栄養繁殖する。	
		生息環境	道端、生垣等の日当たりの良い場所を好む	
		侵入経緯	江戸時代(1720年)に漢方薬として移入、栽培されたものが逸出	
		県内定着状況	正確な野生化時期の記録は無い。最も古い標本として1953年4月高松市で採集した記録がある。他に、1965年志度町、1967年豊浜町、1971年丸亀市、1975年宇多津町の採集記録がある。現在、県内に点在しているが、普通種と言うほどではないが、稀に群生していることがある。	
		影響・被害	ツル性で在来植物の生育を阻害する。	
		防除方法等 特記事項	結実前に抜き取るか、掘り取る。 —	

分類	防除対象	種名等	ナゲシ目ツルムラサキ科	ツルムラサキ
植物	—	原産地	東南アジア	
		選定理由	ツル性で在来植物の生育を阻害する懸念がある。	
		生態的特徴	ツル性の一年生草本で高温多湿を好み、日当たりや排水が良好であれば土壌を選ばない。	
		生息環境	日当たりや排水が良好であれば土壌を選ばない。	
		侵入経緯	江戸時代に観賞用に移入され、最近では健康野菜にも利用される。	
		県内定着状況	古い標本として、1978年に津田町での記録がある。ここでは、シンツルムラサキと区分してない。	
		影響・被害	ツル性で在来植物の生育を阻害する。	
		防除方法等 特記事項	結実前に抜き取るか、掘り取る。 —	

分類	防除対象	種名等	アオイ目アオイ科	フヨウ
植物	—	原産地	中国	
		選定理由	在来植物と競合し、駆逐の懸念がある。	
		生態的特徴	落葉低木、果実は蒴果で、毛に覆われて多数の種子をつける。フヨウとムクゲは近縁であり接木も可能。	
		生息環境	人家周辺の道端や石垣の隙間、海岸近くに生育する。	
		侵入経緯	鎌倉時代に移入され、栽培が逸出している。	
		県内定着状況	正確な野生化時期の記録は無い。古い標本として1965年9月に観音寺市津田町中出で採集した記録がある。県内、特に海岸近くに点在している。	
		影響・被害	在来植物と競合し、駆逐する。	
		防除方法等 特記事項	開花前に抜き取るか、掘り取る —	

分類	防除対象	種名等	シソ目キツネノマゴ科	ヤナギバルイラソウ
植物	—	原産地	北米	
		選定理由	在来植物と競合し、駆逐の懸念がある。	
		生態的特徴	多年生草本で種子の寿命は1年以内、実生は耐陰性が高く、生長すれば耐乾性もある。	
		生息環境	道路端や空地、河川等に稀に逸出している。	
		侵入経緯	1974年沖縄に非意図的に移入されたものが逸出したもの。	
		県内定着状況	正確な最初の逸出記録は無いが、2012年高松市香川町の道路排水溝で野生化しているのを確認した。最近では、道路排水溝や河川域での報告が増えている。	
		影響・被害	在来植物と競合し、駆逐する。	
		防除方法等 特記事項	掘り取り、抜き取りは可能であるが、全ての根の除去は困難。 —	

分類	防除対象	種名等	キク目キク科	カッコウアザミ(ムラサキカッコウアザミ)
植物	—	原産地	熱帯アメリカ	
		選定理由	在来植物と競合し、駆逐の懸念がある。	
		生態的特徴	一年生草本であり、走出枝から再生する。	
		生息環境	畑地、道路端、果樹園などに育成する。	
		侵入経緯	1887年に渡来する。	
		県内定着状況(カッコウアザミ)	正確な野生化時期の記録は無い。古い標本として1960年高松市で、1974年高瀬町で採集した記録があり、稀に見かけることがある。	
		県内定着状況(ムラサキカッコウアザミ)	正確な野生化時期の記録は無いが、稀に見かけることがある。	
		影響・被害	在来植物と競合し、駆逐する。	
		防除方法等	結実前の抜き取りか、走出枝からの再生するので根絶は困難	
特記事項	—			

分類	防除対象	種名等	イネ目イネ科	シマスズメノヒエ
植物	—	原産地	南米	
		選定理由	在来植物と競合し、駆逐の懸念がある。	
		生態的特徴	多年生草本で湿った肥沃地を好み耐旱性、耐暑性がある。	
		生息環境	畑地、荒地、草地等	
		侵入経緯	1915年に小笠原で採取され、戦後に緑化用に使用され急激に広がる。	
		県内定着状況	正確な帰化時期の記録は無い。最も古い標本として1964年10月豊中町で採集した記録がある。おそらくこれ以前に帰化していたものと思われる。現在、県内の道端、溜め池や河川の土手、空地等に広く分布している。	
		影響・被害	在来植物との競合し、駆逐する。	
		防除方法等	実生や幼植物を掘り取る。再生長を防ぐため、根茎も除去する。	
		特記事項	—	

分類	防除対象	種名等	イネ目イネ科	タチスズメノヒエ
植物	△	原産地	南米	
		選定理由	在来植物と競合し、駆逐の懸念がある。	
		生態的特徴	多年生草本で日当たりの良い湿った土壌を好む。	
		生息環境	畑地、荒地、海岸埋立地等に生育する。	
		侵入経緯	1858年に福岡県で確認される。	
		県内定着状況	最初の記録は1981年11月に三野町で、丸亀平野部でゆっくりと広がっていたが、最近では県内に広く拡散し、島嶼部でも見られるようになった。道路端や河川の土手、休耕地などで増加傾向にある。	
		影響・被害	在来植物との競合し、駆逐する。	
		防除方法等	結実前に掘り取る。	
		特記事項	—	

4 産業管理外来種

分類	防除対象	種名等	ツツジ目マタタビ科 キウイフルーツ(オニマタタビ)
植物	—	原産地	中国
		選定理由	在来植物と競合し、駆逐の懸念がある。
		生態的特徴	ツル性の落葉樹で、種子は果樹園などからカラス、タヌキなどにより運ばれる。成木は耐寒性があり、樹齢100年生以上になる。
		生息環境	雑木林等に入り、在来種と競合して在来種を駆逐する。
		侵入経緯	1969年に食用として、移入されたものが国内各地で逸出している。
		県内定着状況	最初の記録は、1990年8月に綾上町粉所下新名であり、野鳥が果実を食して種子を運搬しているのか、現在では讃岐山脈の県境尾根筋にまで逸出している。
		影響・被害 防除方法等 特記事項	在来植物と競合し、駆逐する。 不要な苗や果実を放置せず処分する。抜き取りや伐採を行う。 —

分類	防除対象	種名等	バラ目バラ科 ビワ
植物	—	原産地	中国
		選定理由	石灰岩地域に固有の植物と競合し、駆逐する。
		生態的特徴	常緑の中低木で、暖地の石灰岩地に見られる。
		生息環境	農耕地、自然林、河岸、荒地等に生育し、人だけでなく、カラス、サルなどによる拡散も考えられる。
		侵入経緯	江戸時代末期に食用として移入されてから、本州(関東以西)、九州、四国で野生化している。
		県内定着状況	県内に広く分布している。
		影響・被害 防除方法等 特記事項	在来植物との競合し、駆逐する。 実生や、幼木の段階で掘り取るか、抜き取る。 —

分類	防除対象	種名等	マメ目マメ科 ハリエンジュ(ニセアカシア)
植物	—	原産地	北米
		選定理由	在来植物と競合し、駆逐の懸念がある。
		生態的特徴	落葉の高木で群落を形成する。空中窒素を固定できることから、肥料木としてはげ山復旧や砂防工事で使われたり、街路樹としても使われた。また、蜂蜜の蜜源植物としても利用されている。
		生息環境	市街地、荒地、溪流沿い、河原などに生育する。土壌を選ばず、耐暑性、耐寒性、耐乾性があるが、耐陰性は弱い。
		侵入経緯	1875年に導入の記録があり、全国に分布している。
		県内定着状況	砂防・禿山復旧工事の肥料木や街路樹として植栽されたものが、逸出野生化したもので、山地部を始め、河川、都市部でも普通に見られる。古い標本としては、1965年5月観音寺市柞田町で採集した記録がある。
		影響・被害 防除方法等 特記事項	在来植物との競合、駆逐だけでなく、河川敷等での洪水時の水流障害(河川管理の障害) 実生、幼樹の掘り取り、抜き取り、伐採、除根 —

分類	防除対象	種名等	マメ目マメ科 外来クサフジ類
植物	—	原産地	ヨーロッパ
		選定理由	在来植物と競合し、駆逐する懸念がある。
		生態的特徴	ツル性の1年から越年生草本で、空中窒素を固定できることから緑化に使われたものが逸出した。アレロパシー作用で植物を駆逐する。
		生息環境	道端、河川敷、畑地、牧草地等の日当たりの良い肥沃な砂壤土を好む。
		侵入経緯	明治の終わりごろ緑肥用に普及して全国に広がる。
		県内定着状況	香川県には、ビロードクサフジとナヨクサフジが帰化している。両方とも、当初牧草として導入されたものが逸出したと言うが、その後緑化工事の資材に混入してきたことにより、急速に県内に拡散し、現在普通に見られる。
		影響・被害 防除方法等 特記事項	在来植物と競合・駆逐し、土壌環境が変化して生態系に影響を及ぼす。 結実前に刈り取ることを数年続ける。 —

分類	防除対象	種名等	イネ目イネ科 コヌカグサ(レッドトップ)
植物	—	原産地	ヨーロッパ
		選定理由	在来植物と競合し、駆逐する懸念がある。
		生態的特徴	多年生草本で種子、地下茎、匍匐枝で繁殖し、日当たりの良いところを好むが耐陰性もあり、耐寒性、耐暑性もあり幅広い土壌に適応できる。
		生息環境	畑地、果樹園、道端、休耕地等
		侵入経緯	1968年に牧草として移入、後に緑化工事に使用され、急速に国内に蔓延した。
		県内定着状況	正確な帰化時期の記録は無いが、最も古い標本として1965年6月に豊中町本山での採集記録がある。
		影響・被害 防除方法等 特記事項	在来植物と競合し、駆逐する 小さな個体は抜き取るか掘り取る、大規模になると年4回以上の刈取り、火入れ等が必要。 —

分類	防除対象	種名等	イネ目イネ科 カモガヤ(オーチャードグラス)
植物	—	原産地	地中海、西アジア
		選定理由	在来植物と競合し、駆逐する懸念がある。
		生態的特徴	多年生草本で環境適応性は広く、耐陰性、耐寒性がある。再生力が旺盛で主に種子で繁殖する。
		生息環境	畑地、果樹園、道端、休耕地等
		侵入経緯	1860年代に牧草として移入され、その後、緑化資材等に使用されて全国に広がる。
		県内定着状況	牧草として導入されたものが逸出し、後に緑化工事資材に混入していたものが播種され、県内に広まった。正確な帰化時期の記録は無いが、1950年には既に帰化していたと言う。最も古い標本として1965年4月に観音寺市栗井町で採集した記録があり、県内に点々と見られる。
		影響・被害	在来植物と競合し、駆逐する
		防除方法等 特記事項	実生や小さな苗は掘り取るか、抜き取る、大きなものは開花前に刈り取る。 —

分類	防除対象	種名等	イネ目イネ科 オニウシノケグサ(トルフェスク)
植物	—	原産地	ヨーロッパ、アフリカ北部、西アジア
		選定理由	在来植物と競合し、駆逐する懸念がある。
		生態的特徴	多年生草本で、根茎はほとんどなく種子繁殖である。土壌中の種子の寿命は1年程度と短い
		生息環境	日当たりの良い牧草地、河川敷、道端、樹園地、草地などで、深根性で数十年以上生存。
		侵入経緯	1905年に牧草として移入され、後に法面緑化種としてケンタッキー31フェスクとして全国に広がる。
		県内定着状況	正確な帰化時期の記録は無いが、最も古い標本として1965年5月山本町での記録がある。類似種にヒロハウシノケグサがあるが、ここでは区別していない。
		影響・被害	在来植物と競合し、駆逐する。
		防除方法等 特記事項	実生や小さな苗は掘り取るか抜き取る。大きなものは開花前に刈り取る。 —

分類	防除対象	種名等	イネ目イネ科 ドクムギ(ドクムギ属)
植物	—	原産地	ヨーロッパ
		選定理由	在来種と競合する懸念だけでなく、花粉症の原因でもある。
		生態的特徴	多年生草本で、交雑し、様々な中間型が見られる。種子生産能力が高い。
		生息環境	日当たりの良い畑地、樹園地、牧草地、道端などを好む。
		侵入経緯	明治時代に移入され、全国に広がる。
		県内定着状況	最初の記録は、1985年5月に香南町で、そのほか坂出市林田町番屋前・入船町・築港町の報告があるが、散発的でほとんど見かけない。
		影響・被害	在来植物と競合し、駆逐することに加え、花粉症を引き起こす。
		防除方法等 特記事項	結実前に刈り取るか、抜き取りを行う。 —

分類	防除対象	種名等	イネ目イネ科 ネズミムギ(ドクムギ属)
植物	—	原産地	ヨーロッパ
		選定理由	在来種と競合する懸念だけでなく、花粉症の原因でもある。
		生態的特徴	一年生～越年生の草本で交雑し、様々な中間型が見られる。種子生産能力が高い。
		生息環境	日当たりの良い畑地、樹園地、牧草地、道端などを好む。
		侵入経緯	明治時代に移入され、全国に広がる。
		県内定着状況	1960年頃に三豊郡に帰化していた。種子吹きつけ緑化で大量に使用され、普通に見られる。
		影響・被害	在来植物と競合し、駆逐することに加え、花粉症を引き起こす。
		防除方法等 特記事項	結実前に刈り取るか、抜き取りを行う。 —

分類	防除対象	種名等	イネ目イネ科 ホソムギ(ドクムギ属)
植物	—	原産地	ヨーロッパ
		選定理由	在来種と競合する懸念だけでなく、花粉症の原因でもある。
		生態的特徴	二年生～五年生の多年生草本で、交雑し、様々な中間型が見られる。種子生産能力が高い。
		生息環境	日当たりの良い畑地、樹園地、牧草地、道端などを好む。
		侵入経緯	明治時代に移入され、全国に広がる。
		県内定着状況	1950年頃に既に帰化していた。種子吹きつけ緑化で大量に使用され、普通に見られる。
		影響・被害	在来植物と競合し、駆逐することに加え、花粉症を引き起こす。
		防除方法等 特記事項	結実前に刈り取るか、抜き取りを行う。 —

分類	防除対象	種名等	イネ目イネ科 ボウムギ(ドクムギ属)
植物	—	原産地	ヨーロッパ
		選定理由	在来種と競合する懸念だけでなく、花粉症の原因でもある。
		生態的特徴	一年生草本で、交雑し、様々な中間型が見られる。種子生産能力が高い。
		生息環境	日当たりの良い畑地、樹園地、牧草地、道端などを好む。
		侵入経緯	明治時代に移入され、全国に広がる。
		県内定着状況	県内では、海岸砂地に沢山見られる。
		影響・被害	在来植物と競合し、駆逐することに加え、花粉症を引き起こす。
		防除方法等 特記事項	結実前に刈り取るか、抜き取りを行う。 —

分類	防除対象	種名等	イネ目イネ科 オオアワガエリ(チモシー)
植物	—	原産地	ヨーロッパ
		選定理由	在来種と競合する懸念がある。
		生態的特徴	多年生草本で冷涼な気候を好む。
		生息環境	冷涼で多湿を好み、日当たりの良い、畑地、樹園地、道端などを好む。
		侵入経緯	1874年に北海道に移入された。
		県内定着状況	正確な帰化時期の記録は無いが、最も古い標本として1967年に観音寺市の記録がある。緑化工事に使用されたものが点在して見られる。
		影響・被害	在来植物と競合し、駆逐する。
		防除方法等 特記事項	結実前に刈り取るか、実生や幼苗を抜き取るか掘り取る。 —

分類	防除対象	種名等	イネ目イネ科 モウソウチクなどの竹類
植物	△	原産地	モウソウチクは中国原産。マダケとハチクは中国原産説と7日本原産説がある。
		選定理由	二次林や自然林に侵入し、在来種と競合し、駆逐する懸念がある。
		生態的特徴	節間生長で伸長するなど、一般の樹木とは異なる。
		生息環境	二次林や自然林などだけでなく、耕作放棄地など、場所を選ばず広がる。
		侵入経緯	モウソウチクは、1736年に鹿児島県に移入され、その後野生化している。
		県内定着状況	食用の筍や建築資材等として植栽栽培されていたものが放棄され、香川県全域で拡大し続け、里地周辺の山地だけでなく、讃岐山脈上部県境尾根筋にまで生育している場所もある。
		影響・被害	在来植物の駆逐だけでなく、斜面を不安定化させたり、イノシシの潜伏地に利用されたりしている。
		防除方法等 特記事項	伐採、タケノコの除去、地下茎侵入防止のトタン板設置 —

分類	防除対象	種名等	イネ目イネ科 ナギナタガヤ
植物	—	原産地	ヨーロッパ、アフリカ北部、西アジア
		選定理由	在来種と競合する懸念がある。
		生態的特徴	一年生草本で、乾燥した荒地に生育し、秋にあまり植物の生育していないような場所に芽生え、春から初夏に開花・結実する。
		生息環境	乾燥した裸地を好み、畑地、道端、空き地に生育する。
		侵入経緯	明治時代に移入され、本州、四国、九州に広がる。
		県内定着状況	正確な帰化時期の記録は無いが、最も古い標本として1964年6月観音寺市の記録があるが、これ以前に帰化していたと思われる、現在、県内全域に生育しており、普通種である。
		影響・被害	結実前に刈り取るか、実生や幼苗を抜き取るか掘り取る。
		防除方法等 特記事項	在来植物と競合し、駆逐する。 —

分類	防除対象	種名等	イネ目イネ科 ギネアキビ
植物	—	原産地	東アフリカ
		選定理由	在来種と競合する懸念がある。
		生態的特徴	地域により1年生から多年生草本となり、種子の生産量が多く、休眠性を持つ。
		生息環境	日当たりの良い攪乱地、畑地などを好むが、耐陰性もややあるが、耐寒性は弱い。
		侵入経緯	1960年代から牧草として移入されたものが逸出し、本州から沖縄に広がる。
		県内定着状況	最初の記録は1972年10月に満濃町の記録があり、牧草として導入されたものが逸出したものと思われるが、現在、県内では、あまり報告事例は無い。
		影響・被害	在来植物と競合し、駆逐する。
		防除方法等 特記事項	地下茎を含めて掘り取る。 —

分類	防除対象	種名等	イネ目イネ科 アメリカスズメノヒエ
植物	—	原産地	南アメリカ
		選定理由	在来種と競合する懸念がある。
		生態的特徴	多年生草本で種子の生産量は多く、短い匍匐茎で旺盛に繁殖する。
		生息環境	日当たりの良い湿った畑地、樹園地、牧草地、水田などを好む。
		侵入経緯	1952年に移入され、緑化用に用いられてから急速に広がり、本州から沖縄で見られる。
		県内定着状況	最初の記録は1970年8月の普通寺市、丸亀市で記録があり、現在、道路縁や河川・ため池の堤等を中心に、県内に広く見られる。
		影響・被害	在来植物と競合し、駆逐する。
		防除方法等 特記事項	結実前に刈り取るか、実生や幼苗を抜き取るか掘り取る。 —

5 特別選定種:環境省のリストには無いが、香川県で問題となりそうな外来種

分類	防除対象	種名等	オモダカ目トチカガミ科 アマゾントチカガミ (アマゾンフロッグピット)
植物	△	原産地	南米
		選定理由	在来植物と競合し、駆逐することが懸念される。
		生態的特徴	浮遊性の多年生草本で繁殖茎をのばして子株を作りながら増えたり、種子繁殖も行える。
		生息環境	ため池、河川
		侵入経緯	観賞用の水草として1973年以前に移入されたものが逸出した。
		県内定着状況	最初の記録は、2007年7月に高松市、さぬき市津田町・寒川町・大川町・志度、三木町、坂出市大東川、綾川町綾川、丸亀市川西町・飯山町、善通寺市、琴平町金倉川、観音寺市豊浜町等の記録がある。2010年頃には県内各地で散見される様になったが、最近栽培が減少したのか、一時ほどは見かけなくなった。
		影響・被害	在来植物と競合し、駆逐する。
		防除方法等 特記事項	繁殖茎とともに除去し、種子の結実前に除去する。 —

分類	防除対象	種名等	セリ目ウコギ科 ウチワゼニグサ(タテバチドメグサ)
植物	○	原産地	北米
		選定理由	在来植物と競合し、駆逐することが懸念される。
		生態的特徴	抽水～湿性の多年生草本で地下茎を伸ばし、そこから葉柄を伸ばして広がり、耐寒性があり地下茎で越冬する。
		生息環境	ため池、湖沼、河川、水路などに生育する。
		侵入経緯	観賞用に1960年頃に移入されたものが逸出した。
		県内定着状況	最初の記録は、2008年4月に丸亀市、さぬき市津田町津田、高松市香川町、高松市楠上町・国分寺町・香南町、坂出市大東川、綾川町等の記録がある。最近逸出記録が増加しており、河川河口部のたまり部分での群生事例が増加し始めている。
		影響・被害	在来植物と競合し、駆逐する。
		防除方法等 特記事項	地下茎や断片も含めて除去する。遮光シートで抑えた事例もある。 —

分類	防除対象	種名等	キク目キク科 メリケントキンソウ
植物	○	原産地	南米
		選定理由	在来種との競合の懸念だけでなく、果実に鋭いトゲを持ち、人やペットにケガを負わせることがある。
		生態的特徴	一年生の草本植物で高さ5cmで、繁殖力が旺盛でトゲを持ち果実で広がる。
		生息環境	公園、グラウンド、道端
		侵入経緯	運動用具や芝刈機具に付着して拡散していると思われていたが、最近、造園資材にも混入して拡散していることが分かった。
		県内定着状況	最初の記録は、2009年5月に丸亀市土器川河川公園のほか、高松市春日町の花壇、坂出市大屋富町グラウンド、丸亀市飯山町東二土器川の河原、三豊市財田町財田上「道の駅たからだの里さいた」での記録がある。
		影響・被害	在来種との競合、果実のトゲによるケガなど
		防除方法等 特記事項	抜き取りや除草剤の散布 —

分類	防除対象	種名等	キンボウゲ目ケシ科 シラユキゲシ(スノーピー)
植物	—	原産地	中国
		選定理由	在来植物と競合し、駆逐することが懸念される。
		生態的特徴	多年生草本で耐乾性が強いもので、地下茎で増殖し、山地の湿った場所を好む
		生息環境	林床部に見られる。
		侵入経緯	園芸品種で持ち込まれたと考えられる。
		県内定着状況	2019年8月にまんのう町大川山で記録されたものが県内では、初めてである。
		影響・被害	在来植物と競合し、駆逐する。
		防除方法等 特記事項	地下茎を含めての抜き取り —

分類	防除対象	種名等	ツククサ目ツククサ科 カロライナツククサ
植物	—	原産地	インド原産
		選定理由	農産物(大豆)との競合が懸念される。
		生態的特徴	1年生草本で幼植物ではツククサと形態が似る。発根性が強く、栄養繁殖により急激に個体数を増加させる。
		生息環境	畑地、畦地、河川、水路
		侵入経緯	2006年頃から西日本で確認されている。
		県内定着状況	最初の記録は2006年8月に三豊市三野町、高瀬町上高瀬、豊中町での報告、その後報告が途絶えたが、2013年にさぬき市津田町、2015年にさぬき市造田是弘、2016年に東かがわ市白鳥と次第に広がり、県内の耕作地や河川、乾燥した道路側溝等に拡散している。発根性が強く、耕作地では、耕耘による切断で、栄養繁殖により急激に個体数を増加させる。
		影響・被害	大豆との競合
		防除方法等 特記事項	少数でもすぐに除草剤で防除する。 —

分類	防除対象	種名等	ナデシコ目タデ科 外来ツルソバ(仮称:ヒマラヤツルソバ)
植物	—	原産地	原産地不明
		選定理由	在来植物と競合し、駆逐することが懸念される。
		生態的特徴	半蔓植物で在来種のツルソバの変種としたり、同一とする見解がある。
		生息環境	温暖な海浜や海岸に生育する。
		侵入経緯	カバープランツとして導入されたものが逸出したもの。
		県内定着状況	最初の記録は、2009年7月に直島町で、その後、2019年11月に坂出市岩黒島でも繁茂していた。
		影響・被害	在来植物と競合し、駆逐する。
		防除方法等 特記事項	抜き取り、除草剤 —

分類	防除対象	種名等	イネ目イネ科 イトアゼガヤ類似種
植物	—	原産地	中国南部から熱帯アジア、アフリカ
		選定理由	在来植物と競合し、駆逐することが懸念される。
		生態的特徴	1年生草本で乾燥地に見られるが繁殖力が強い。
		生息環境	日当たりの良い草地、畑地に生育する。
		侵入経緯	侵入の経緯は明らかでないが、飼料や厩肥として供されたものに混入し、堆肥として施用されたものと思われる。
		県内定着状況	2019年9月に多度津町奥白方で一帯に数千株以上が群生している事例がある。
		影響・被害	在来植物と競合し、駆逐する。
		防除方法等 特記事項	抜き取り、除草剤 熊本県、鹿児島県RDB掲載種

分類	防除対象	種名等	キク目キク科 ポンポンアザミ
植物	—	原産地	南米
		選定理由	在来植物と競合し、駆逐することが懸念される。
		生態的特徴	多年生草本で根が地中深くまで伸長し、定着すると駆除困難と言われる。
		生息環境	風散布され、繁殖力が強く、不安定な場所や裸地、湿潤地などにも適応している
		侵入経緯	2008年に愛知県で確認されたもので、園芸種から逸出したもの。
		県内定着状況	2017年12月に高松市香川町で確認、現在、周辺部への拡散は確認されていない。
		影響・被害	在来種との競合。(愛知県では、H23年3月に県条例で野外放出行為を規制している。)
		防除方法等 特記事項	除草作業を1回でなく、継続して行う必要がある。 アザミとは無関係な種類

分類	防除対象	種名等	イネ目イネ科 ヨシススキ
植物	—	原産地	インド～東南アジア
		選定理由	在来植物と競合し、駆逐することが懸念される。
		生態的特徴	大型の多年生草本で、日当たりの良い所を好み、土壌の種類を選ばない。サトウキビの最も近縁野生種。
		生息環境	畑地、樹園地、路傍、荒地
		侵入経緯	飼料植物や防風垣として移入されたものが、逸出したと考えられる。
		県内定着状況	2013年10月に高松市庵治町で道路路面緑化用に導入されているのが判明し、道端に逸出しているのが確認された。意図的な移入以外では、2015年10月の綾川町滝宮茶田原弥十郎池。2017年10月に、東かがわ市川東原間の古川の高速道路高架下周辺川岸に帰化しているのが発見され、当該地ではその後拡散しつつある。
		影響・被害	在来植物と競合し、駆逐する。
		防除方法等 特記事項	掘り取る。 —

VI 侵略的外来種 侵入警戒種リスト

参考

通し No.	分類群	和名	備考			香川県				国(環境省)			
			特定 外来 生物	分布		防除 対象 種	選定 理由	対策優先度要件※		選定 理由	対策優先度要件※		備考
				県内 広域 分布種	県内 点在 分布種			県内 限定 分布種	被害の 深刻度		実効性・ 実行 可能性	被害の 深刻度	
【国外由来の外来種】													
侵入した場合、総合的に対策が必要な外来種(総合対策外来種)													
緊急対策外来種													
1	昆虫類	アルゼンチンアリ	○	-	-	-	IV	-	-	I, III	①④	⑤	特定外来
2	昆虫類	アカカミアリ	○	-	-	-	IV	-	-	I, III	①②④	⑤	特定外来
3	昆虫類	ツマアカスズメバチ	○	-	-	-	IV	-	-	I, III	①④	⑤	特定外来
その他の総合対策外来種													
4	魚類	カラドジョウ	-	-	-	-	IV	/	/	I	/	/	旧要注意外来
5	昆虫類	クロジャコウカミキリ	-	-	-	-	IV	/	/	IV	/	/	-
6	その他の無脊椎動物	コモチカワツボ	-	-	-	-	IV	/	/	IV	/	/	-
7	その他の無脊椎動物	カラムシロ	-	-	-	-	IV	/	/	I, III	/	/	旧要注意外来
定着を予防する外来種(定着予防外来種)													
侵入予防外来種													
8	昆虫類	ヒアリ	○	-	-	-	IV	/	/	I, III	/	/	特定外来
【国内由来の外来種、国内に自然分布域を持つ国外由来の外来種】													
侵入した場合、総合的に対策が必要な外来種(総合対策外来種)													
重点対策外来種													
9	その他の無脊椎動物	サキグロタマツメタ	-	-	-	-	IV	-	-	-	-	-	-
10	その他の無脊椎動物	カワヒバリガイ	-	-	-	-	IV	-	-	-	-	-	-

Ⅶ 侵入警戒種リスト 種の解説

分類	防除対象	種名等	ハチ目アリ科 アルゼンチンアリ
		原産地	南米
		選定理由	在来種との競合や住居等への侵入による不快害虫、農業被害への懸念がある。
		生態的特徴	多数の働きアリからなる大規模なコロニーをつくる。小型動物の捕食やアブラムシ類、カイガラムシ類を保護する。
		生息環境	5～35℃で活動できる。
		侵入経緯	建築資材などに紛れて侵入している可能性がある。
		影響・被害	在来種との競合や不快害虫、農業被害。
		防除方法等	アリ駆除剤の散布
特記事項	特定外来生物		
分類	防除対象	種名等	ハチ目アリ科 アカカミアリ
		原産地	北米～中米
		選定理由	在来種との競合や農業被害、人的被害(刺傷・咬傷)への懸念がある。
		生態的特徴	塚をつくり、雑食性でカイガラムシ類を保護する。
		生息環境	亜熱帯地域の裸地、開けた草地の地中に営巣する。
		侵入経緯	米軍の物資などに紛れて侵入している可能性がある。
		影響・被害	在来種との競合や農業被害、人的被害(刺傷・咬傷)。
		防除方法等	アリ駆除剤の散布
特記事項	特定外来生物		
分類	防除対象	種名等	ハチ目アリ科 ヒアリ
		原産地	南米
		選定理由	在来種との競合や人的被害(刺傷・咬傷)への懸念がある。
		生態的特徴	地下にコロニーをつくり、春から晩秋まで繁殖可能。
		生息環境	草地などの開けた環境。
		侵入経緯	貨物コンテナなどに混入して移入。
		影響・被害	在来種との競合や人的被害(刺傷・咬傷)。
		防除方法等	殺虫剤
特記事項	特定外来生物		
分類	防除対象	種名等	ハチ目スズメバチ科 ツマアカスズメバチ
		原産地	東南アジア
		選定理由	ミツバチを捕食するため、養蜂業に被害がある。在来スズメバチ類と競合している。在来昆虫類の捕食による送粉系サービスへの被害が懸念される。
		生態的特徴	昆虫類、特にハエ類やミツバチ類、トンボ類を捕食する。巣に近づくと攻撃的になり、毒針で刺し執拗に追跡する。
		生息環境	田園地域。都市にも生息域を拡大している。
		侵入経緯	不明
		影響・被害	養蜂業への被害、在来種との競合、人的被害(刺傷)
		防除方法等	殺虫剤、巣の撤去
特記事項	特定外来生物		
分類	防除対象	種名等	コウチュウ目カミキリ科 クロジャコウカミキリ(クビアカツヤカミキリ)
		原産地	中国、モンゴル、朝鮮半島、台湾、ベトナム
		選定理由	サクラ、モモ、ウメ、カキ、ポプラに寄生し、枯死させる懸念がある。
		生態的特徴	幼虫が樹木の辺材や心材内部で2～3年過ごし、成虫は6月頃脱出し2週間程度の寿命。
		生息環境	公園、市街地の街路樹、果樹園
		侵入経緯	貨物の木製梱包材に付随して移入
		影響・被害	サクラ、モモ、ウメ、カキ、ポプラの枯死
		防除方法等	宿主の伐採、成虫への薬剤散布
特記事項	特定外来生物		
分類	防除対象	種名等	コイ目ドジョウ科 カラドジョウ
		原産地	中国、朝鮮半島
		選定理由	在来種との競合や交雑による遺伝的攪乱が懸念される。
		生態的特徴	流れのない泥底の環境を好み、雑食性
		生息環境	水田、ため池やそれにつながる用水路
		侵入経緯	食用種として輸入されたドジョウ類に混入して移入。漁協による放流等により各地で繁殖。
		影響・被害	在来種との競合や交雑による遺伝的攪乱
		防除方法等	—
特記事項	旧要注意外来生物種		

分類	防除対象	種名等	中腹足目ミズツボ科 コモチカワツボ
その他の無脊椎動物	—	原産地	ニュージーランド
		選定理由	在来種との競合の懸念がある。
		生態的特徴	淡水生の巻貝で雌雄異体だが、単為生殖を行うことで高い繁殖力を有する。塩分耐性が高い。
		生息環境	砂礫を好み、湧水などの冷水環境でも見られる。
		侵入経緯	輸入のマス、ウナギに混ざり移入された可能性あり、1990年に三重県で最初の報告あり。
		影響・被害	在来種との競合
		防除方法等 特記事項	既侵入水域からの水生生物の移入を行わない。 —

分類	防除対象	種名等	新腹足目オリレヨフバイ科 カラムシロ
その他の無脊椎動物	—	原産地	中国
		選定理由	在来種との競合の懸念がある。
		生態的特徴	干潟の巻貝で腐肉食
		生息環境	砂～泥質の干潟
		侵入経緯	アゲマキ等の輸入に混ざり移入したと考えられる。
		影響・被害	在来種との競合、漁業対象種の食害
		防除方法等 特記事項	— —

分類	防除対象	種名等	吸殻目タマガイ科 サキグロタマツメタ
その他の無脊椎動物	—	原産地	東アジア
		選定理由	在来種との競合への懸念がある。
		生態的特徴	汽水域の巻貝で肉食性で二枚貝に付着して殻を開けて中の肉を食べる。
		生息環境	干潟や15mまでの泥底
		侵入経緯	輸入アサリに混入して移入したと考えられる。
		影響・被害	アサリの食害など、在来種との競合
		防除方法等 特記事項	— —

分類	防除対象	種名等	イガイ目イガイ科 カワヒバリガイ
その他の無脊椎動物	—	原産地	中国
		選定理由	吸虫類の第一宿主になり、在来魚への影響の懸念がある。
		生態的特徴	淡水生の二枚貝で水中の暗い場所を好み、導水管などに大量に繁殖することもある。
		生息環境	淡水の岩の裏など
		侵入経緯	バラスト水に含まれた浮遊幼生で移入
		影響・被害	淡水魚への影響や導水管の閉塞など
		防除方法等 特記事項	3～6日目に当てると死亡する。 特定外来生物

Ⅷ 参考文献

- 1 阿部永・石井信夫・伊藤徹魯・金子之史・前田喜四夫・三浦慎悟・米田政明. 2008. 日本の哺乳類 改訂2版. 東海大学出版会.
- 2 一般財団法人自然環境研究センター. 2019. 最新 日本の外来生物. 平凡社.
- 3 国立研究開発法人 国立環境研究所 生物・生態系環境研究センター 侵入生物研究チーム. 侵入生物データベース.
(<https://www.nies.go.jp/biodiversity/invasive/index.html>)